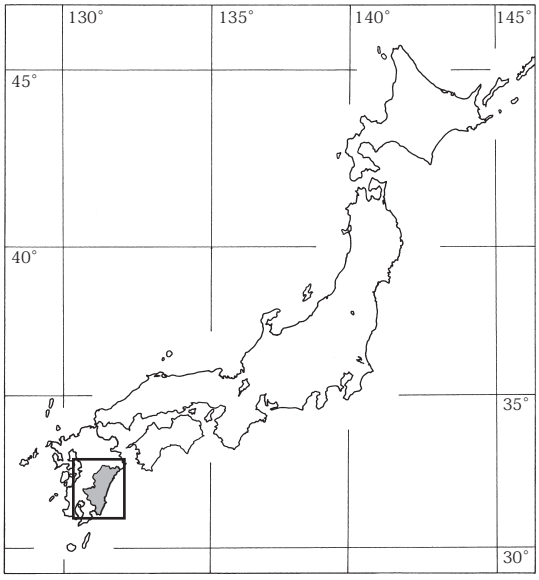
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２２１集

串間市所在

坂ノ口遺跡

（さかのくち）

一般国道448号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



２０１２

宮崎県埋蔵文化財センター

坂ノ口遺跡遠景（遺跡上空東方向より大隅半島方面を望む）

【巻頭図版2】

1号竪穴建物遺物出土状況（南より）

1号竪穴建物出土土器

序

宮崎県教育委員会では、平成22年度に一般国道448号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴う発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回発掘調査を実施した坂ノ口遺跡は、本県の最南端に位置する串間市にあります。串間市は日本列島で唯一の玉璧が出土したと伝えられる地であり、海を介した中国大陸との交渉があったといわれております。中世には、南九州における日明貿易の拠点として栄えました。

発掘調査では、縄文時代の土坑や古墳時代の竪穴建物などが発見され、地域色豊かな土器や石器が出土しました。

ここに報告する内容は、今後、本地域の歴史をひもとく手がかりとなるものです。本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた地域の方々、関係諸機関、並びに御指導・御助言を賜った方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成24年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　　隆　茂

例　言

1　本書は、一般国道448号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県串間市大字本城字坂ノ口に所在する坂ノ口遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、串間土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成22年8月26日から平成22年10月28日まで行った。

3　発掘調査は、調査第二課第三担当主事宗廣睦子・同課第四担当主査黒木俊彦が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影については、上記以外に同課第三担当副主幹吉本正典、主査和田理啓、主査中田憲治、主事加藤徹の協力を得た。

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務は、遺物の実測については宗廣が整理作業員の協力を得て行い、トレースと写真撮影については宗廣が行った。

5　本書は、第Ⅰ章第１節を日高広人、それ以外の執筆と全体の編集は宗廣が行った。

6　基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、株式会社中島測量設計コンサルタントに委託した。調査区の掘削排土移動及び復旧業務は、株式会社谷口組、株式会社高橋工務店に委託した。

7　自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。試料は、超音波洗浄、酸・アルカリ・酸洗浄による前処理ののち、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトＡＭＳ：ＮＥＣ製1.5ＳＤＨ）によって分析された。

8　本書で使用した地図は、国土地理院発行の五万分の一地形図（都井岬、志布志、末吉、飫肥）、五千分の一国土基本図（ⅡＰＥ－75、76、85、86）をもとに作成した。また、使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海抜絶対高を示す。

9　遺構の深さについては、全て検出面からの数値を、遺構の規模については、東西×南北にて表記している。

10　石器については、敲打痕を残す部分は◌、擦痕を残す部分は網かけ、擦り切るような敲打部分は両者を併用して表現した。なお、火打ち石に関してはこの限りではない。

11　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2006『新版　標準土色帖』28版に準じた。

12　発掘調査においては、串間市教育委員会宮田浩二氏、整理作業にあたっては、東和幸氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、桒畑光博氏（都城市教育委員会）、藤木聡氏（西都原考古博物館）より御教示を得た。

13　調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 1
第３節　整理作業の経過 …… 1
第４節　調査の組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と環境 …… 3
第２節　既往の調査と歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法 …… 8
第２節　発掘調査区の層序 …… 8
第３節　検出遺構と出土遺物 …… 9
１　縄文時代早期以前の調査
土坑 …… 9
２　縄文時代前期以降の調査
土坑 …… 9
３　古墳時代の調査
竪穴建物 …… 11
土器だまり …… 18
古墳時代の土師器について …… 19
第４節　遺構に伴わない遺物
石器 …… 21
土器 …… 21

第Ⅳ章　総括 …… 27

図　版　目　次

巻頭図版１　坂ノ口遺跡遠景

巻頭図版２　上　１号竪穴建物遺物出土状況

下　１号竪穴建物出土土器

図版１　１　土層堆積状況１　２　土層堆積状況２

３　３・４号土坑調査状況　４　１号土坑調査状況

５　２号土坑調査状況　６　２号土坑遺物出土状況

図版２　１　１号竪穴建物上面遺物出土状況　２　１号竪穴建物粘土塊出土状況

３　１号竪穴建物遺物出土状況近景

４　１号土器だまり遺物出土状況遠景　５　１号土器だまり遺物出土状況近景

図版３　１　旧石器～縄文時代の石器　３　２号土坑出土縄文土器　５　１号竪穴建物出土鉄鏃

２　西之薗式土器　４　縄文時代後期の土器

６　１号竪穴建物出土土器１　７　１号竪穴建物出土土器２

８　１号竪穴建物出土土器３　９　１号竪穴建物出土土製品

図版４　１　１号竪穴建物出土土器　２　１号竪穴建物出土土器

３　１号竪穴建物出土石器

４　１号土器だまり出土土器１　５　１号土器だまり出土石器　６　１号土器だまり出土土器２

７　包含層出土陶磁器類　８　火打石側面

挿　図　目　次

第１図　坂ノ口遺跡と主要遺跡分布図 …… 5

第２図　調査地と周辺地形 …… 7

第３図　坂ノ口遺跡土層堆積図 …… 8

第４図　検出遺構とトレンチ配置図 …… 9

第５図　１～５号土坑平断面図 …… 10

第６図　２号土坑出土遺物実測図 …… 10

第７図　１号竪穴建物平断面図 …… 12

第８図　１号竪穴建物出土遺物実測図１ …… 14

第９図　１号竪穴建物出土遺物実測図２ …… 15

第10図　１号竪穴建物出土遺物実測図３ …… 16

第11図　１号竪穴建物出土遺物実測図４ …… 17

第12図　１号竪穴建物出土炭化物暦年較正結果 …… 18

第13図　１号土器だまり出土遺物実測図１ …… 20

第14図　１号土器だまり出土遺物実測図２ …… 21

第15図　包含層出土遺物実測図１ …… 22

第16図　包含層出土遺物実測図２ …… 23

表　目　次

表１　坂ノ口遺跡基本層序 …… 8

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 … 18

表３　坂ノ口遺跡出土遺物観察表 …… 27

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

一般国道 448 号は、鹿児島県指宿市を起点とし、串間市や日南市を経由して宮崎市に至る幹線道路であり、地域の産業経済を支えるほか、日南海岸国定公園内を周遊する観光道路としても重要な路線である。

このうち上千野地区から代田地区の区間（延長１㎞）については、交通量が多いにもかかわらず、幅員が狭小で道路線形が悪く歩道も未整備なため、交通安全上危険な状態となっていた。このため串間土木事務所では、安全で円滑な交通を確保するため歩道設置も含めた拡幅改良工事を計画していた。宮崎県文化財課では工事区間の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地である坂ノ口遺跡が含まれていたことから、平成 20 年度より同事務所と協議を行い、平成 22 年５月 20 日から 21 日にかけて確認調査を実施した。この結果、縄文時代から古墳時代等の遺物が出土し、遺跡の一部が埋蔵文化財が影響を受けると判断されたため、その取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であるという結論に至り、記録保存のための本発掘調査を実施することになった。

発掘調査は串間土木事務所事務所長の依頼を受けて、県埋蔵文化財センターが同年８月 19 日から 10 月 28 日まで実施した。

第２節　調査の経過

文化財課による確認調査の結果を踏まえ、発掘調査対象範囲は遺物包含層が良好に残存する約480㎡とした。調査地は隣接する国道448号との比高差が４mほどあり、発掘調査に先立つ掘削工事もあったことから、調査地南側、東側は崖状となっていた。こういった周辺環境を考慮し、安全を確保するため、掘削対象範囲の周囲に十分なスペースを設けた。その結果、調査対象範囲は最終的に約400㎡となった。調査対象範囲以外に関する調査は行っていない。

調査は８月28日より開始した。重機にて表土を除去し、以下の掘り下げに着手した。精査と掘り下げを繰り返し行い、アカホヤ火山灰層上で竪穴建物を１軒と土器だまりを１基、土坑を４基検出した。その後、下部の状況を調査するため、部分的にアカホヤ火山灰層を重機にて除去し、37.0㎡の下部確認トレンチを設けた。その結果土坑１基を検出した。さらに調査区北壁沿いにトレンチを設け、下位の土層堆積状況の記録を行った。10月28日、現地でのすべての調査を終了した。調査では、コンテナ10箱分の遺物が出土した。

第３節　整理作業の経過

当センターに持ち帰った遺物は、水洗、注記、接合、実測の過程を経て整理した。接合段階では、同一層および遺構面のものとで接合関係を確認した。実測では、器種および部位がわかるものを対象として、132 点を図化した。

第４節　調査の組織

坂ノ口遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

平成 22 年度　発掘調査・整理作業

所長		森　隆茂
副所長		北郷　泰道
総務課長		矢野　雅紀
総務課担当リーダー	副主幹	長友　由美子
調査第二課長		永友　良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本　正典
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣　睦子（調査・整理担当）
調査第二課調査第四担当	主査	黒木　俊彦（調査担当）

発掘作業員　大隈　洋子　川崎　知子　中野　郁美子　水野　順子
小倉　和子　楠　正　中村　光子　水野　大作
川崎　健治　佐藤　哲司　廣見　幸一

整理作業員　出口　江美
畑中　美穂

平成 23 年度（整理作業）

所長		森　隆茂
副所長		北郷　泰道
総務課長		坂上　恒俊
総務課副主幹総務担当リーダー	副主幹	長友　由美子
調査第二課長		永友　良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本　正典
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣　睦子（整理担当）

整理作業員　永友　和子
畑中　美穂

事業調整　文化財課　主査　日高　広人（平成 22・23 年度）

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と環境

坂ノ口遺跡の位置する串間市は、宮崎県の最南端部に位置し、東は日向灘、南は志布志湾に面する。東西、北の三方を鰐塚山（1,118.8 m）を最高点とする南那珂山地が囲み、これによって日南市、都城市、鹿児島県志布志市と接する。鰐塚山系から志布志湾に向かって南流する小河川が下流域で福島川となって平野部を形成し、その周囲には河岸段丘と谷の入り組んだ山間部が広がる。一帯は海成層の日南層群をベースとし、砂岩・頁岩の互層が主体を占めるが、場所によりシラス台地が覆っている。77㎞に及ぶ海岸線では、市木の海岸や都井岬一帯などで種々の亜熱帯植物が自生しており、変化に富んだ自然を見ることができる。海岸には大小の入江が連なり、天然の良港として知られてきた。

坂ノ口遺跡は、串間市の中心部から南東へおよそ 3.6㎞、高畑山（517.6 m）の東山麓に広がる本城地区に位置する。一帯は高畑山から流れる小河川が山間をぬって志布志湾、日向灘へと流れ、谷部には狭小な可耕地が形成されている。「谷の水が出る所は一坪であっても田にした」という江戸時代の記述は、可耕地の少なさをよく表している。坂ノ口遺跡の位置する丘陵は、代田川の流れる谷部を西側から見下ろす緩傾斜地に位置する。代田川は、その東方を流れる本城川と河口付近で合流し、まもなく港周辺で海に注ぐ。東方には高畑山がそびえ、南方にはなだらかな丘陵がのび、徐々に標高を減じ志布志湾に達する。遺跡から海岸線までは直線距離で 1.7㎞ほどであるが、海を直接望むことはできない。遺跡周辺の地質は頁岩と溶結凝灰岩によって構成されている。

第２節　既往の調査と歴史的環境

串間市による詳細分布調査によると、市域に広く遺跡や散布地が存在し、その時代は旧石器時代から近・現代に及ぶことがわかっている。本城でもこれまで発掘調査が実施されているが、歴史的考察を行うには絶対的に情報が不足しているといってよい。ここでは、広く市域における発掘調査の成果をまじえながら、坂ノ口遺跡をとりまく周辺の歴史的環境について概観したい。

福島川上流域の留ヶ宇戸遺跡や後藤野遺跡（奈留）で出土したナイフ形石器、剥片尖頭器は、旧石器時代終末期段階を示す稀少な資料である。市域では、「シラス」とよばれる姶良カルデラ由来の入戸火砕流が 10 m～ 20 mの厚さで堆積しており、旧石器時代終末期以前に相当する部分の調査は事実上困難となっている。

縄文時代にはいると、山間部を中心に多数の遺跡が確認されており、前期まで集石遺構を伴う傾向がある。台地上に位置する三幸ヶ野遺跡（一氏）では、集石遺構や多量の無文土器とともにバリエーション豊かな隆帯文土器が出土しており、当地における草創期段階の指標遺跡となっている。早期段階の遺跡は比較的確認数が多く、本城でも調査例がある。坂ノ口遺跡の東方、中園川と黒仁田川に挟まれた小平野部を見下ろすシラス台地上には、本城において初出となった早期段階の上篠原遺跡がある。集石遺構と塞ノ神式土器や石製品などの遺物が確認され、後晩期段階の遺物も出土している。上篠原遺跡の川向かい標高 60 mの山稜上に位置する別府原遺跡では、明確な包含層は確認されなかったが組織痕土器や貝殻文土器が出土しており、付近に包蔵地の存在を示唆している。縄文時代早期と前期を画する指標

とされているのが鬼界カルデラが噴火した際の鬼界アカホヤ火山灰であり、市域では40cmほど堆積している。前期段階の遺跡は山間部の大平遺跡にとどまり、本城地区でも未確認である。後期ごろになると、先述の三幸ヶ野遺跡で弥生時代にかけての大規模集落、福島川河口近くの下弓田遺跡で竪穴建物群と石錘、軽石製の浮子といった漁労具が出土しており、山と海それぞれの暮らしぶりを知ることができる。

弥生時代ごろに位置づけられる大田井ヶ丘遺跡（北方）は、杓子形土器や鉢形土器などのまとまった出土があったことから、祭祀遺跡との見方がある。周辺では箱式石棺やＶ字形周溝が見つかっている。

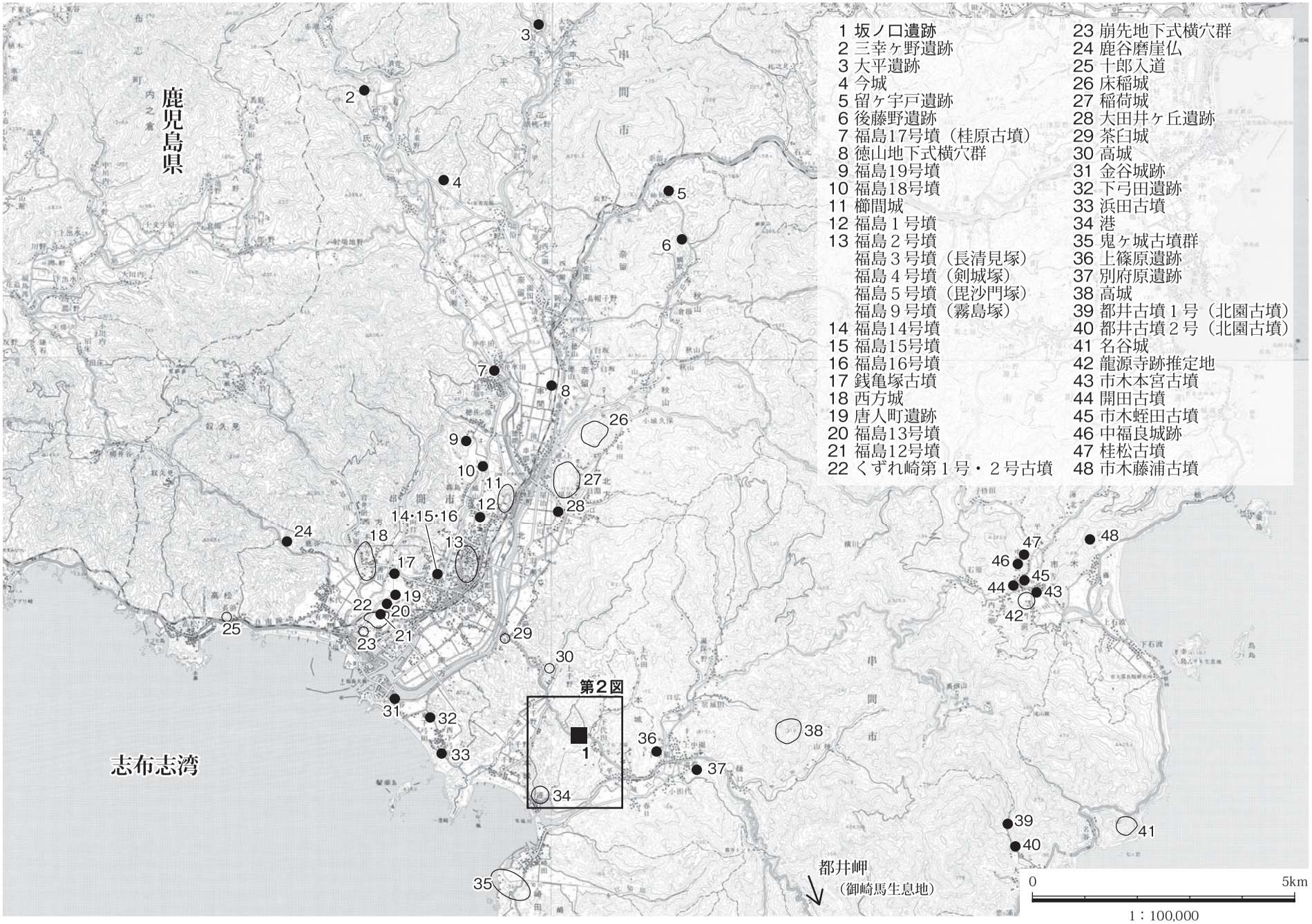
古墳時代の集落遺跡では、複数の竪穴建物が確認された唐人町遺跡がある。古墳時代の墓域は、①河岸段丘上やシラス台地上に高塚墳を中心として箱式石棺と地下式横穴墓が分布する福島川流域と、②浦に臨む丘陵上に高塚墳と箱式石棺が分布する本城、都井、市木地区の二つに大きく分けられる。前方後円墳が分布するのは①のエリアのみであり、一帯の中核的な墳墓群であるとみられている。善田原の銭亀塚古墳では、県内では例をみない平石積石槨が検出され、６世紀代に比定されている。崩先地下式横穴群や、徳山地下式横穴墓（奈留）は、玄室の大きさに比べて竪坑が大きいという特色がある。地下式横穴墓が分布するのもこのエリアだけである。②は、本城と市木がその中心である。崎田の海を見下ろす丘陵上に位置する鬼ヶ城古墳群は、横穴式石室を内部主体にもつ５世紀後半～６世紀初頭ごろの古墳群である。箱式石棺から頭椎大刀が出土した市木藤浦古墳は、７世紀前半に位置づけられている。

「串（櫛）間」が文献上に登場するのは、承平四（934）年に完成した『和名類従抄』が最初である。延暦十四（795）年に櫛間院が設置され、税稲を収納する院倉と院司とよばれる役人が置かれたとある。この時代には、本地垂迹の盛行によって、三十五社大明神（現市木神社）や極楽寺（北方）が建立された。この頃の作といわれる磨崖仏（鹿谷）は県下でも珍しい、凝灰岩に彫られたものである。

中世以降、軍事・政治の中心となったのが櫛間城である。建武元（1334）年、櫛間院および深川院の地頭職に就いた野辺氏によって築造された。大規模な空堀で区画される13から14の独立した曲輪で構成され、典型的な南九州タイプの中世城といわれる。市域には、年代が判然としない中・近世の城址が多数分布している。平野部を見下ろす丘陵上に位置するもの、海を眼前に見下ろす丘陵上に位置するものとがある。坂ノ口遺跡から高畑山を挟んで北東方向に位置する中福良城（市木）は、室町期に島津元久が攻めた「市木城」に比定されるという。本城近辺だけでも４か所の城址が確認されているが、ここはその名称が「城」を冠するとおり、城と何らかの関わりをもつ土地であることを示唆している。

野辺氏時代に始まった明との貿易は島津治世時に盛行し、島津氏は幕府より遣明船の保護と日向の浦々の警固を命じられた。大坂堺から中国寧波に至るルート上に位置する飫肥（外（と）ノ浦）、本城崎田港には外国船が頻繁に出入りし、大いに賑わいをみせた。天文年間に著されたポルトガルの航海学者ジョルジ・アルヴァレスの日本報告記や、文録四（1595）年にオルテリウスが出版した銅板製の日本地図に「ＭＩＮＡＴＯ」の名がみえるが、これは本城に現存する「港」の地名である。港には、貿易船に給水したと伝えられる古井戸が残り、最近まで使われていたという。明との往復文書の作成や通訳を担う儒僧を求めた島津氏は各地より高僧を招請し、市木の龍源寺や日南市飫肥の安国寺がその中心となった。特に龍源寺は外ノ浦と本城の中間にあたることから学僧が集まった。桂庵玄樹や月渚といった名僧を輩出し、朱子学を通じて高度な大陸文化を伝えた。龍源寺跡地に比定される現市木中学校付近には、「門前」の地名と、この頃造られたとみられる六地蔵幢柱と石柱が残る。

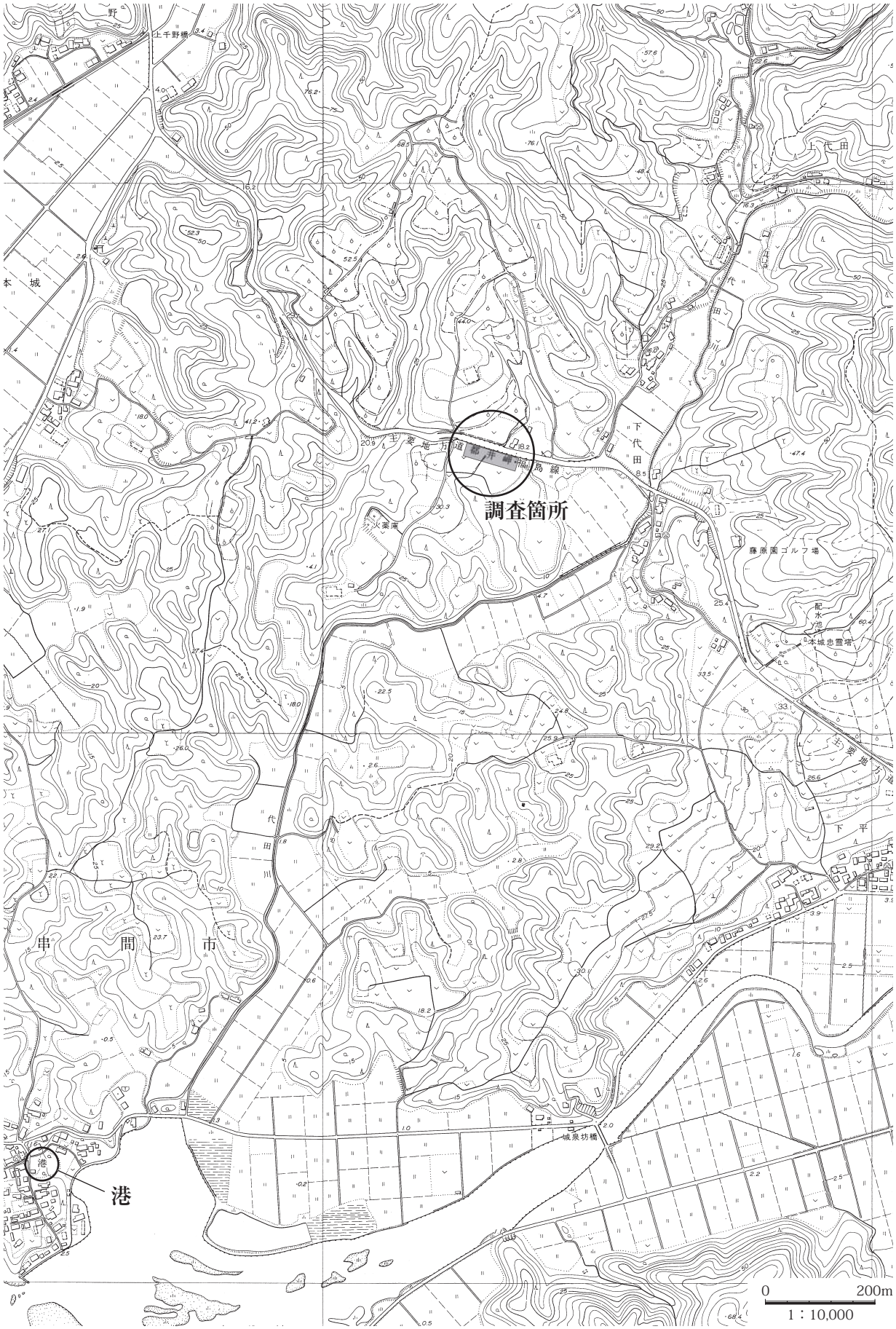
天正十五（1587）年、豊臣秀吉の九州征伐によって秋月氏が財部（高鍋）・櫛間に転封されたのをきっ



第１図　坂ノ口遺跡と主要遺跡分布図（S＝１／100,000）

かけに、日向各地に官営の牧が置かれ、櫛間では金谷城下町の建設が行なわれた。現在都井岬に生息する御崎馬はこの名残である。秋月氏が慶長九（1604）年に財部に移ったことで、櫛間城は廃城となった。江戸期にはいると、本城の港は天候不順時などの風待ち港として利用されるようになった。薩摩藩領の人々を中心に賑わい、初の旅問屋もひらかれている。

最後に、串間の歴史を語るうえで避けては通れないのが玉璧である。幕末から江戸期にかけて活躍した漢詩人・小野湖山による箱書きには幕末の探検家・松浦武四郎の名と、「文政元年戊寅二月に、日向国那珂郡今町の農民・佐吉が所有する王之山で石棺を掘り出し、古玉と鉄器、三十点あまりが出土した」とある。玉璧の出土地を求めて、瀬之口伝九郎や石川恒太郎が「王子谷」および先述の銭亀塚古墳の調査を行ったが、解明には至っていない。「王之山」という地名は見あたらないが、「日向国那珂郡今町」が現在の串間市大字今町に該当し、玉璧が鉄器を伴っていたことから、南九州、および宮崎県南の出土は整合的であるとの見方がなされている。市域では、出土地と状況は明確でないが燕期の貨銭、明刀銭も出土している。



第２図　調査地と周辺地形（S= １／ 10,000）

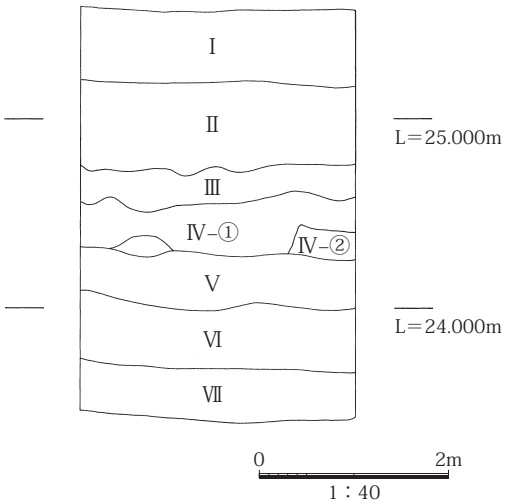
第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

調査は、まず重機にて表土を除去し、以下の掘削に着手した。試掘調査で遺物および遺構の確認されたⅡ層、Ⅳ－①層での調査を主眼とし、ジョレンによる精査とクワなどによる掘り下げ作業を繰り返し行った。遺物の集中がみられた場合にはサブトレンチを設け掘り形の有無を確認し、遺構を検出した際は適宜図面、写真による記録をとりながら調査を進めた。Ⅳ－①層上での調査終了後、アカホヤ火山灰層以下の状況を調査するため、部分的にアカホヤ火山灰層を重機にて除去し、37.0㎡の下部確認トレンチを設けた。Ⅴ層からⅥ層ＡＴ火山灰風化層上面まで、上記と同様の調査を行った。なお、遺物はトランシットによって、層位別に取り上げた。

第２節　発掘調査区の層序（第３図、表１）

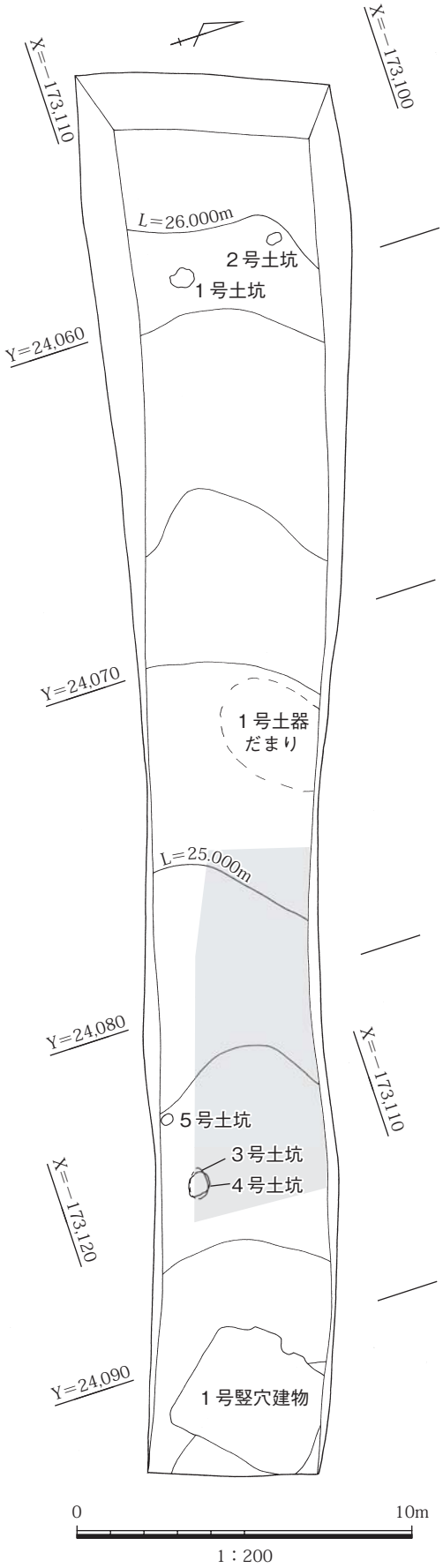
土層体積状況については、調査区北壁、東壁にて記録を行った。調査着手以前、対象地は日南串間ゴルフコース敷地内であり、一部は駐車場として使用されていた。現地表面の標高は 25 ～ 27m を測る。Ⅱ層褐色土層と表土との間には明瞭な境界を引くことができるうえ、一部機械的な段差が見られた。ゴルフ場造成時に整地が行われたものと考えられる。水道を通したビニールパイプや重機の掘削痕跡がⅣ－①層まで及び、調査区西端では撹乱坑を検出した。Ⅲ層黒色土はⅡ層に近い土質をもつ。坂ノ口遺跡の位置する丘陵一帯で認められるが、堆積は安定しない。Ⅱ、Ⅲ層は古墳時代の遺物を含んでいる。Ⅱ層上では古墳時代前期の土器だまりを検出した。Ⅳ－①層では縄文時代前期以降に位置づけられる土坑と、古墳時代前期の竪穴建物を検出している。Ⅴ層以下は粘質土が続き、深くなるにつれ色調が黄色みを増し、Ⅷ層ＡＴ火山灰層に達する。Ⅴ層上で土坑を１基検出した。



第３図　坂ノ口遺跡土層堆積図（S＝１／40）

表1　坂ノ口遺跡基本層序

表	土	造成土。黒褐（10YR3/2）色。
Ⅱ	層	ボラを多く含む。褐（7.5YR4/4）色。粘性なし、しまりあり。
Ⅲ	層	ボラを含む。黒（7.5YR2/1）色。粘性なし、しまりあり。 丘陵一帯で偏在する。
Ⅳ－①層		アカホヤ二次堆積層。きめ細かく、Ⅳ－②よりふかふかしている。 粘性なし、しまりあり。明褐（7.5YR5/8）色。
Ⅳ－②層		鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）。ボラ礫により構成される。粘性なし、しまりあり。Ⅳ－①よりも赤みが強い。
Ⅴ	層	砂粒をほとんど含まない粘質土層。粘性きわめて強く、しまりあり。にぶい褐（7.5YR6/3）色。
Ⅵ	層	黒褐（10YR3/1）色粘質土層。
Ⅶ	層	にぶい黄橙（10YR6/3）色粘質土層。



第４図　検出遺構とトレンチ配置図（S= １／200）
下部確認トレンチ

第３節　検出遺構と出土遺物

１　縄文時代早期以前の調査

【土坑】（第５図）

４号土坑

調査区南壁面、Ⅴ層上にて確認した。大きさは最大部で 94 × 62㎝、深さ 90㎝である。底部はⅧ層上位まで達している。遺物は出土していない。早期以前に掘り込まれたものである。後述する３号土坑に掘り込まれている。

２　縄文時代前期以降の調査

【土坑】（第５図）

Ⅳ―①層上面で４基検出した。

１号土坑

大きさ 65㎝× 60㎝、深さ 12㎝である。埋土中にて礫を多数検出し、礫には被熱痕跡が認められる。時期は不明であるが、包含層中より同様の礫を多数検出していることから、本遺跡において集石遺構としての使用があった可能性も指摘しておきたい。

２号土坑

大きさ 40 × 50㎝、深さ 22㎝である。埋土上位から中位にかけて、土器片（第６図）と礫を検出した。

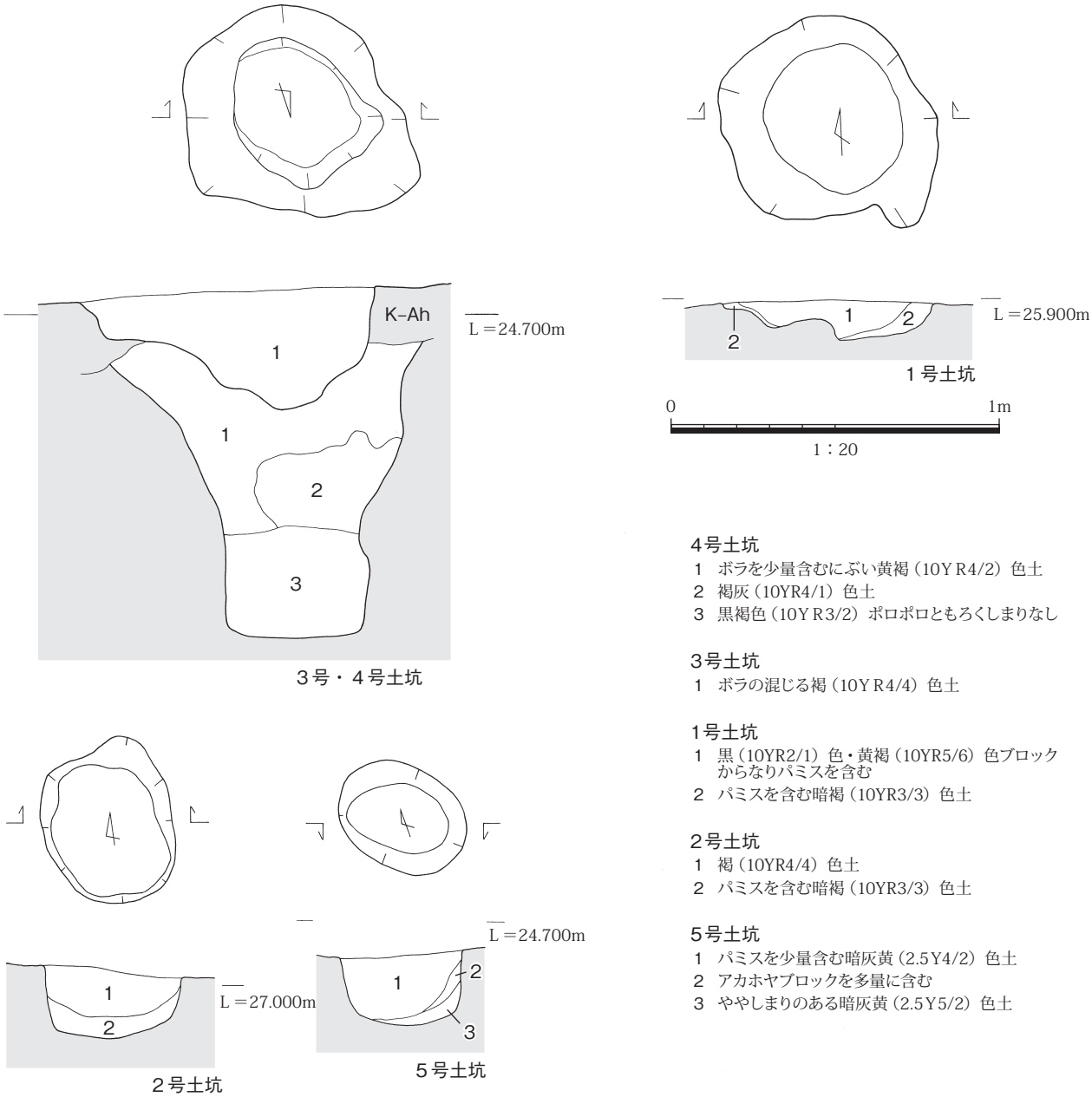
１、２ともに粘土の接合部分で破損しており、２は擬似口縁状をなす。外面のタタキ痕は縦、横方向がある。前期以降に埋没したとみられる。

３号土坑

先述した４号土坑の平面調査中に南壁面で発見したため、すでに遺構の北半分は失われていた。アカホヤ降下後に掘り込まれているため、前期以降の遺構と考えられる。大きさは東西幅 90㎝、深さ 36㎝。遺物は出土しておらず、用途は不明である。

５号土坑

大きさ38×36㎝、深さ20㎝。遺物はなく、時期、用途ともに不明である。



4号土坑
1　ボラを少量含むにぶい黄褐（10Y R4/2）色土
2　褐灰（10YR4/1）色土
3　黒褐色（10Y R3/2）ポロポロともろくしまりなし

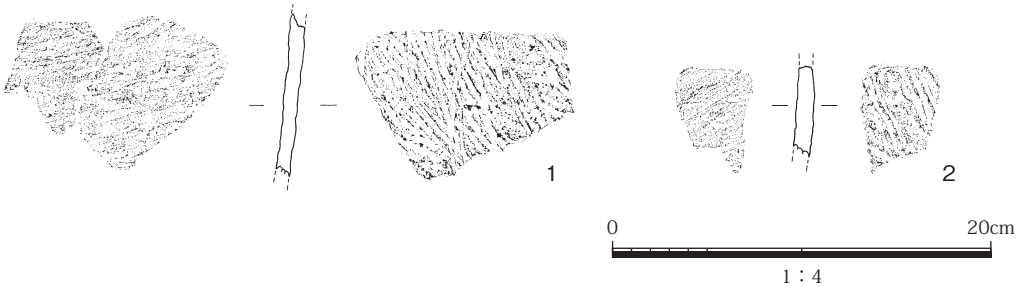
3号土坑
1　ボラの混じる褐（10Y R4/4）色土

1号土坑
1　黒（10YR2/1）色・黄褐（10YR5/6）色ブロックからなりパミスを含む
2　パミスを含む暗褐（10YR3/3）色土

2号土坑
1　褐（10YR4/4）色土
2　パミスを含む暗褐（10YR3/3）色土

5号土坑
1　パミスを少量含む暗灰黄（2.5Y4/2）色土
2　アカホヤブロックを多量に含む
3　ややしまりのある暗灰黄（2.5Y5/2）色土

第５図　１～5号土坑平断面図（S＝1／10）



第６図　２号土坑出土遺物実測図（S＝１／４）

3　古墳時代前期の調査

【竪穴建物】（第７図）

１号竪穴建物

調査区東端部、Ⅳ―①層上面で検出した。大きさは 3.4 × 3.8 m、深さは 20㎝である。平面形はわずかに南北に長い隅丸方形を呈し、西側面には２か所の張り出しをもつ。遺構北西コーナー部分がわずかに調査区外にあたる。遺構検出前段階に、本遺構の上部にて遺物の集中的な出土があったが、遺構の掘方が平面上で確認できず、遺構としては認識しなかった。その後さらに掘り下げと精査を重ねると、遺物の破片の大きさが大きくなり始め、分布密度が増した。サブトレンチを設け断面での確認を行ったところ、遺構の立ちあがりが確認されたことから、竪穴建物として認識するに至った。埋土は単層で、貼り床は確認できなかった。床面では９基のピットを検出した。床面からの深さはいずれも 10㎝程度と浅く、埋土はしまりがない。出土遺物は、ほとんどが小片の状態で出土し同一の遺物が遺構のあちこちに分布することから、埋没時には遺物が破片の状態であったことが考えられる。出土遺物の垂直分布状況を検討した結果、遺物は遺構の南東方向から流れこんでいると判断された。出土遺物は土師器を主とした土器が 53 点、石器が８点、鉄器が１点である。ここでは、図化に耐えうるものについて報告を行う。その他重要と思われるものについては､巻末の図版編にて掲載している。ここで報告する遺物は、現地での遺物出土状況及び取り上げ時の観察と、トランシットによる取り上げ記録をもとにした垂直分布状況の分析に基づき、本遺構に伴う遺物と判断したものを報告する。

土師器

３～ 10は甕である。３、６はタタキ痕を顕著に残し、胴部の仕上がりは凹凸が激しくいびつである。７は粗いハケメを施し、断面に灰色の部分を残し外面がわずかに淡橙色を帯びる。６、９は頸部内面へのケズリの施し方が酷似する。いずれもススが外面に付着し、９に顕著である。８は球胴甕で、内外面に丁寧なハケメを施す。11 ～ 17は壺である。11、12は外面には細かなハケメを施し器面がなめらかであるのに対し、内面は表面における混入物の露出が顕著である。胴部には粘土帯の単位と見られる凹凸が残る。胎土中の白色透明鉱物の含有量が著しく多い。14は薄手のつくりで、外面にススが付着する。13、15 ～ 17はいずれも焼成が堅緻で、13は口縁部外面に多条の波状文を２段巡らせる。16、17はいずれも幅５㎜ほどの工具によるナデ調整を施す。18 ～ 38は高坏である。21は脚部上端のしぼり部分が坏部底に残る。23はナデ痕を明瞭に残す。22、24はハケメののちにナデを施す。環状の粘土帯を介して口縁部を接合する。25は坏部と脚部を接合するために粘土を貼り付けるが、脚部が欠落している。28は外面は幅5㎜ほどの工具によるナデ、裾部内面はハケメを施し、脚部はナデのみでケズリ等を施さない。26、29は坏部と脚部を刻み目の入った環状の粘土帯で接合する。29は粘土帯と脚部との間に入念なナデが施される。29の粘土帯に施された刻み目は幅が細く、粘土の流入が認められない。坏部が接合されないまま焼成された可能性も考えられる。30は坏部と脚部の間に小さな皿状の粘土を充填する。外面調整はケズリとハケメである。坏部と脚部の接合部は、内面に粘土塊を押しつけることで強化を図っている。脚部は中空のものと中実のものとがある。31 ～ 38は調整方法はミガキ、ケズリである。32、33、35は脚部内面上端をなめらかに整える。34、36、37は脚部と坏部の間に粘土塊を押し込むが、36、37はさらにヘラ状工具で切り込みを入れることで、接合を強化している。34のケズリは脚部内面に工具の木目痕を筋状に残す。37は幅の細いミガキを縦横に施す。38は単口縁をもつも

のである。坏部は胎土に混入物をほとんど含まないが、脚部は白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片を多く含んでいる。部位によって胎土の使い分けを行っている可能性がある。32 ～ 37は、残存する脚部上端部がくぼんでいることから、粘土を充填して坏部が接続されるものと考えられる。なお、35は外面、38は坏部内面に明らかに焼成時のものではないと見られるススの付着がある。39 ～ 44は小型丸底壺である。39は外面にハケメ状工具によるケズリ、口縁部内面に木目幅の広いハケメを施す。40は内面に工具ナデを施す。41は板状工具によるケズリを内外に施す。42は断面に黒色部分を残す。胴部にはハケメを残し、口縁部周辺は入念なナデを施す。43はハケメの印象が21に酷似する。44は内外に39と同様のケズリを施す。45 ～ 47は器台である。45のみ、ハケメ調整時に目の細かい工具と広い工具とを併用する。46は外面よりも内面のハケメを丁寧にナデ消す。48は有孔円盤状の土製品、49は縦長の

第７図　１号竪穴建物平断面図（S＝１／40）

形状を呈すミニチュアの土器である。いびつな立方体状の土製品（図版３－９、109）も出土している。48は微小な白色透明鉱物と炭片を胎土に含む。後二者は白色透明鉱物と黒色鉱物を含む。48、49は焼きが甘く非常にもろいが、ｃのみ比較的堅緻で、一部被熱痕が認められる。50は環状の胴部に上から粘土を押し込み、底部を形成する。51は焼成がきわめて甘くもろい。52はタタキ痕が明瞭に残る。53は外面はミガキ、内面はハケメを施し、内外面ともに非常に丁寧に調整され、器壁が薄い。54は内外面にミガキを施す縄文時代後期の土器片である。55の縄文土器は内外面に条痕を残す。

石器

56は敲打痕、擦痕両方の痕跡を残す。57 ～ 62は石器中央に敲打痕、外周部分に磨り切るような打痕が残る。外周部の打痕は使用の単位が面となって残り、59のように外周のあらゆる部分を使用したものもある。62、63はわずかな敲打痕のみである。すべて砂岩製である。これら素材となった砂岩は一帯の地盤の主体をなすものであることから、遺跡周辺で採石された可能性が高い。この他にも、打痕などの痕跡は認められないが台石上の石（図版４－３、110）と、鉄分のわずかな付着と擦痕が残る砥石（図版４－３、111）、鉄岩石ともよばれるノジュール（図版４－３、112）が出土している。

鉄器

64 は弥生時代の柳葉型鉄鏃と考えられる。鋒と茎部分は失われている。

その他

本遺構の北西ブロックで粘土塊が出土し（図版２－２）、白色透明鉱物や細かなスサ状の繊維質が含まれていた。同様の混入物を含む土器群（Ａグループ）も存在することから、土器の胎土であった可能性も考えられる。

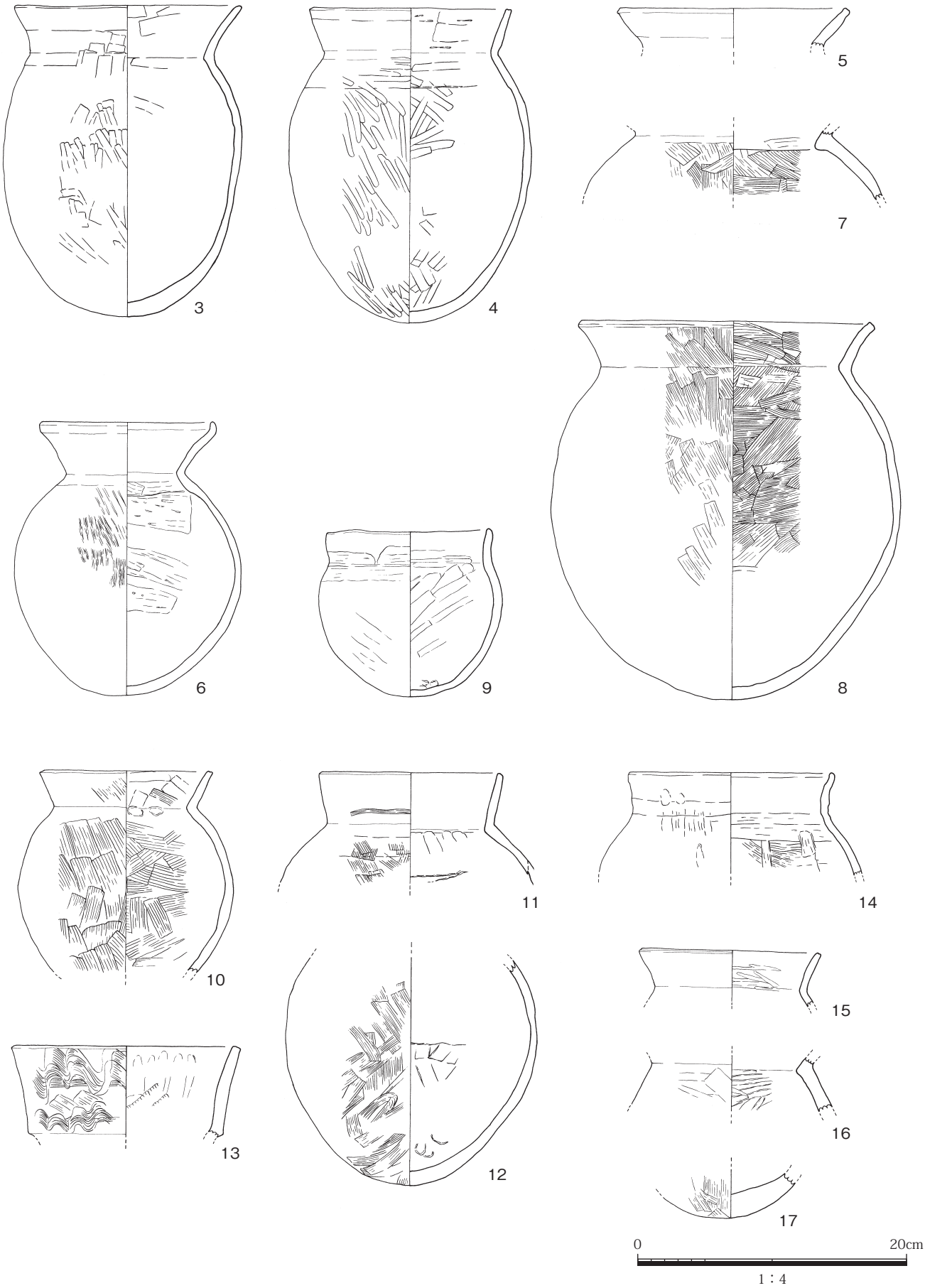
遺構の時期

出土遺物の形状や調整などの諸特徴から、遺構が埋没した時期は布留２～３式併行段階にあると考える。これは、次の段階に姿を消すとされる小型器台が組成に含まれていることからも裏付けられよう。遺構の埋没した時期は、古墳時代前期後半に位置づけられる。なお、遺構検出前段階に遺物の集中が見られたこと、Ⅱ層上で検出した１号土器だまり（後述）との時期差がほとんどないことから、本来はⅡ層上から掘り込まれていた可能性があることを記しておく。

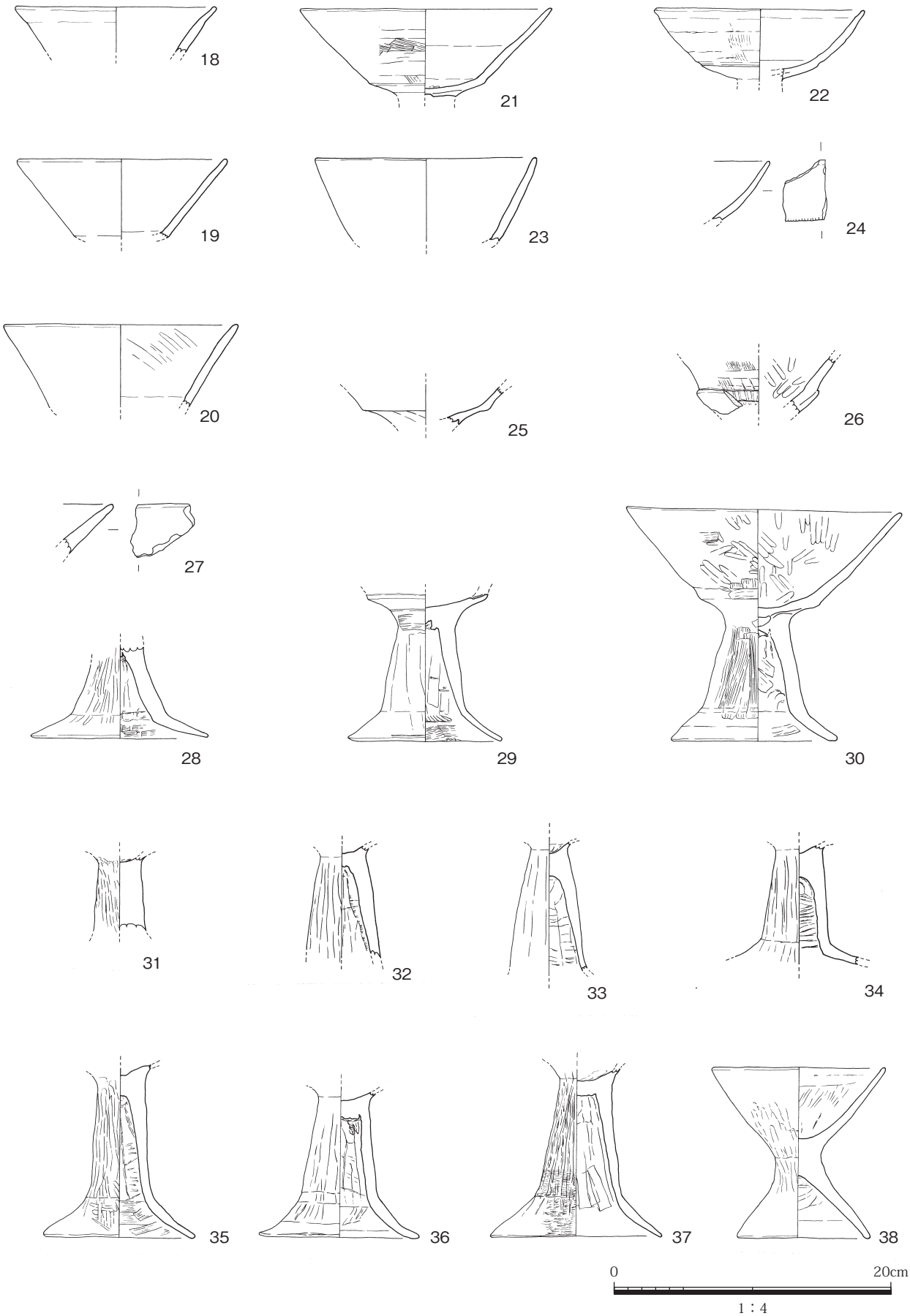
１号竪穴建物出土炭化物の自然科学分析

遺構の埋没時期の特定を目的として、１号竪穴建物の埋土中より出土した炭化物２点について加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による分析を行った。試料２点は、採取後アルミホイルに包み、コンテナ内に保管していた。

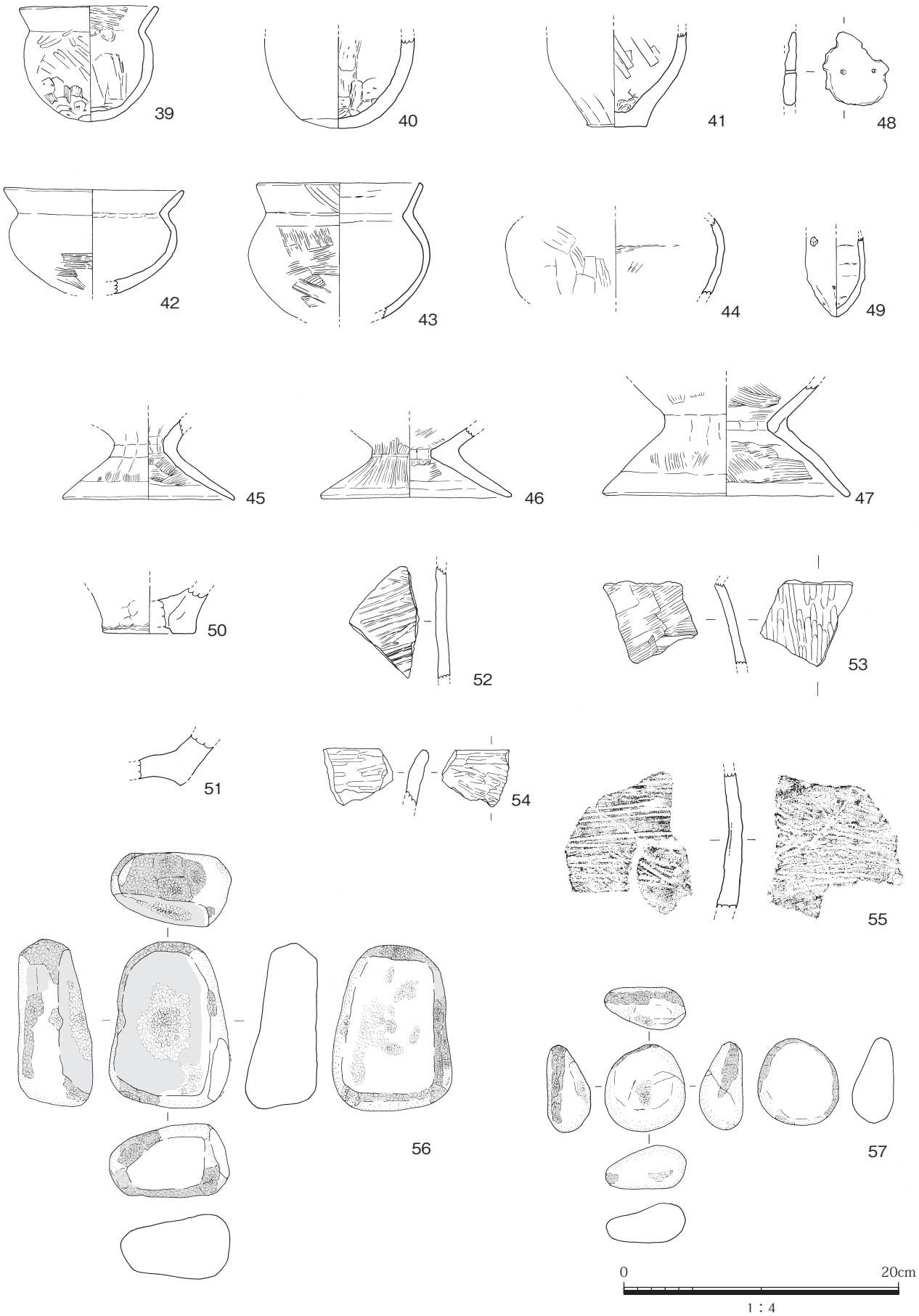
放射性炭素年代測定および暦年較正の結果、以下の結果が出た（表２）。２点とも弥生時代後期から古墳時代前期に相当すると結果が出た（表２、第 12 図）。出土遺物の時期とも齟齬がないといえる。ただし、２点の試料は部位不明の木材のため、古木効果による影響を考慮しておく必要がある。



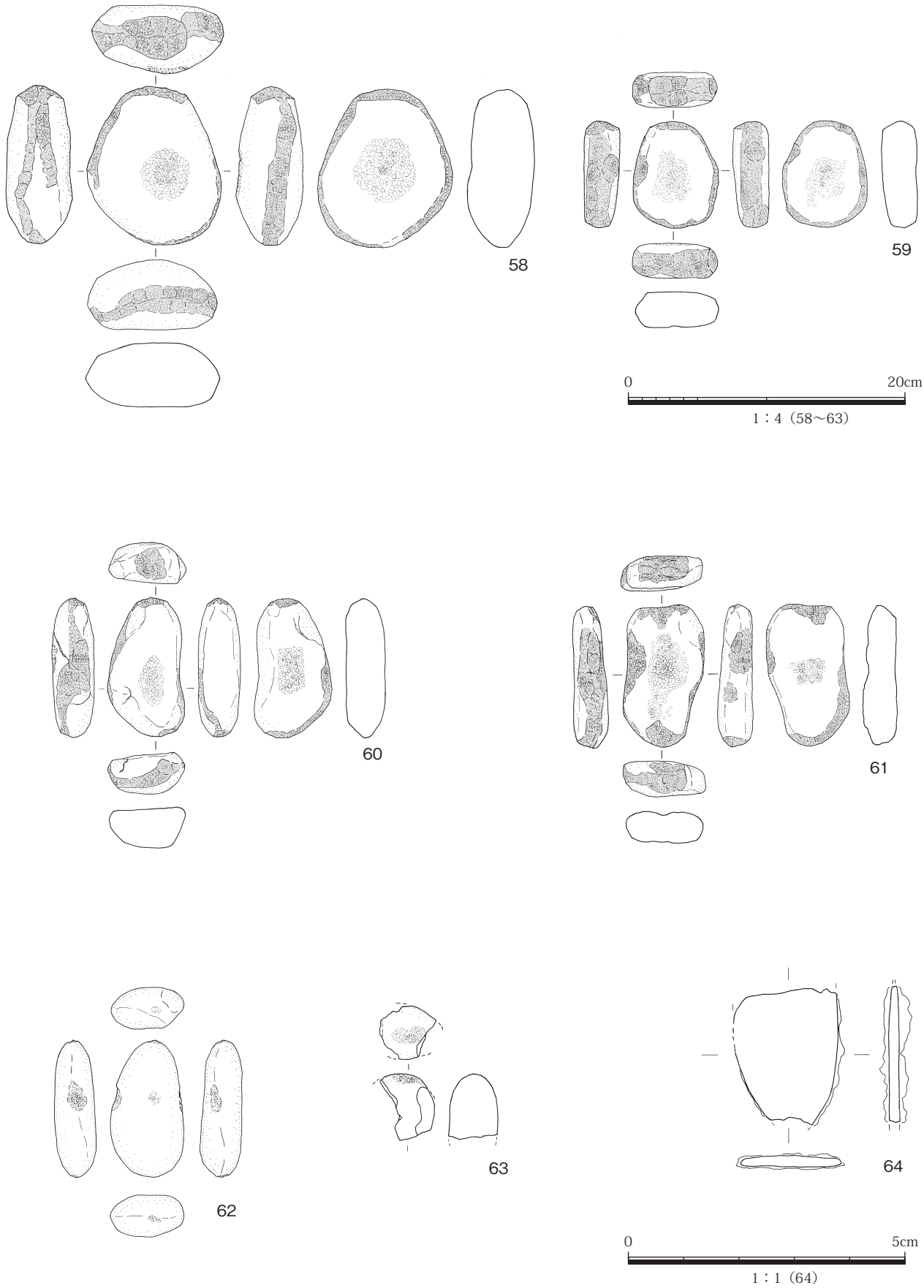
第８図　１号竪穴建物出土遺物実測図１（S＝１／４）



第９図　１号竪穴建物出土遺物実測図２（S＝１／４）



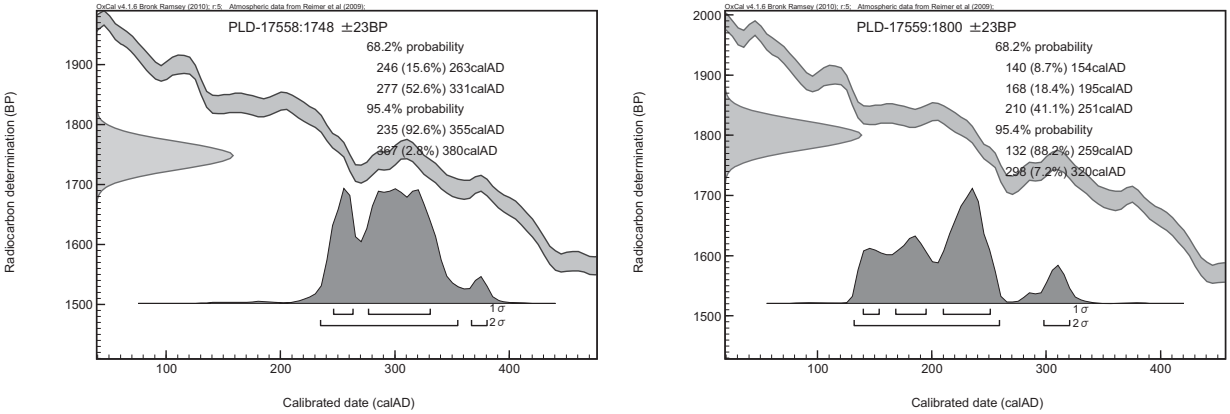
第10図　１号竪穴建物出土遺物実測図３（S＝１／４）



第11図　１号竪穴建物出土遺物実測図４（S＝１／４）

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD－17558	－27.51±0.36	1748±23	1750±25	246AD(15.6%)263AD 277AD(52.6%)331AD	235AD(92.6%)355AD 367AD(2.8%)380AD
PLD－17559	－30.55±0.30	1800±23	1800±25	140AD(8.7%)154AD 168AD(18.4%)195AD 210AD(41.1%)251AD	132AD(88.2%)259AD 298AD(7.2%)320AD



第 12 図　１号竪穴建物出土炭化物暦年較正結果

【１号土器だまり】（図版２－４、５）

調査区中央部北壁、Ⅱ層掘り下げの過程で検出した。遺物の集中的な出土があったことから精査を試みたが、掘り込みの有無は確認できなかった。遺物の広がりは３×３ｍほどで、遺物の堆積は浅い。土器が大部分を占め、わずかに石器が加わる。ここでは図化に耐えうる土器17点、石器３点を報告する。

出土遺物

土師器

65 ～ 68は脚台をもつ広口甕であり、工具ナデによって調整している。口縁部に施されたナデによって胴部との明瞭な境界をもつ。66は特にナデ痕が顕著である。65は貼り付け突帯が巡り、一部２重になる。突帯に施される刻み目は凸部分が狭く、凹部分が幅広である。刻み目には繊維痕が伴う。68は円盤状の粘土板で胴部を包みこむように接合するが、ナデつけは乱雑ですき間が多く見られる。69の底部はわずかに上げ底状を呈し、器壁が厚い。70 ～ 73は壺である。70は口縁部のハケメ以外は丁寧なナデを施す。72は口縁部内面に部分的にミガキを施す。73の二重口縁壺は口縁部外面全体に波状文を巡らせ、内面には縦方向のナデ痕を顕著に残す。74は突帯の中央に稜線をもち、等間隔で幅の細い刻み目が施される。広口甕の屈曲部と考えられ、器壁は薄く、整ったつくりである。75の突帯の切りこみは突帯の中ほどまででとどまり、突帯はふくよかである。76は外面にナデ、内面はハケメを施し、器壁には製作過程の単位と見られる亀裂が残る。77､78は高坏である。77の高坏は底部が欠落している。78は脚部内面上端に粘土を押し込み、ナデつけて接合を補強する。坏部と脚部の間には粘土を充填し

たとみられるくぼみがある。調整、色調の点で１号竪穴建物の30と似た印象をもつ。79、80は鉢である。どちらも焼成が非常に不良でもろく摩滅が著しいが、ハケメの使用が認められる。80は、内面のみ全面灰色を呈する。81は外面ミガキ、内面が条痕による調整を行う縄文時代後期頃のものである。

石器

82 は正面に擦痕、上面に敲打痕が見られる。83 は正面、上面、下面にそれぞれわずかな敲打痕が残る。84 は正面に擦痕、左側面に擦り切るような敲打痕が確認できる。

遺構の時期

広口甕の口縁部が胴部との間に明瞭な境界をもつことから、内村直子氏の編年１期、古墳時代前期後半に位置づけられる。なお、遺物の垂直分布状況を分析すると、１号竪穴建物が完全に埋没してしまったのち、同遺構上に遺物のわずかな集中がある。この遺物集中と１号土器だまりがほぼ同一線上にあることから１号土器だまりは１号竪穴建物よりも新しいといえる。

【古墳時代の遺構出土土師器について】

胎土混入物と色調によって、６つのグループに分けられる。

【Ａ】白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片を多く含み、浅黄色を呈する。

【Ｂ】混入物はＡと同じだがきわめて微細で少量、桃色を帯びた黄色を呈する。

【Ｃ】【Ｂ】と同様の混入物を含み、くすんだ黄色を呈する。ミガキを多用し、にぶい光沢を帯びる。

【Ｄ】Ｂとの共通点を多くもつが、焼成が非常に甘く色調が白色を帯びる。

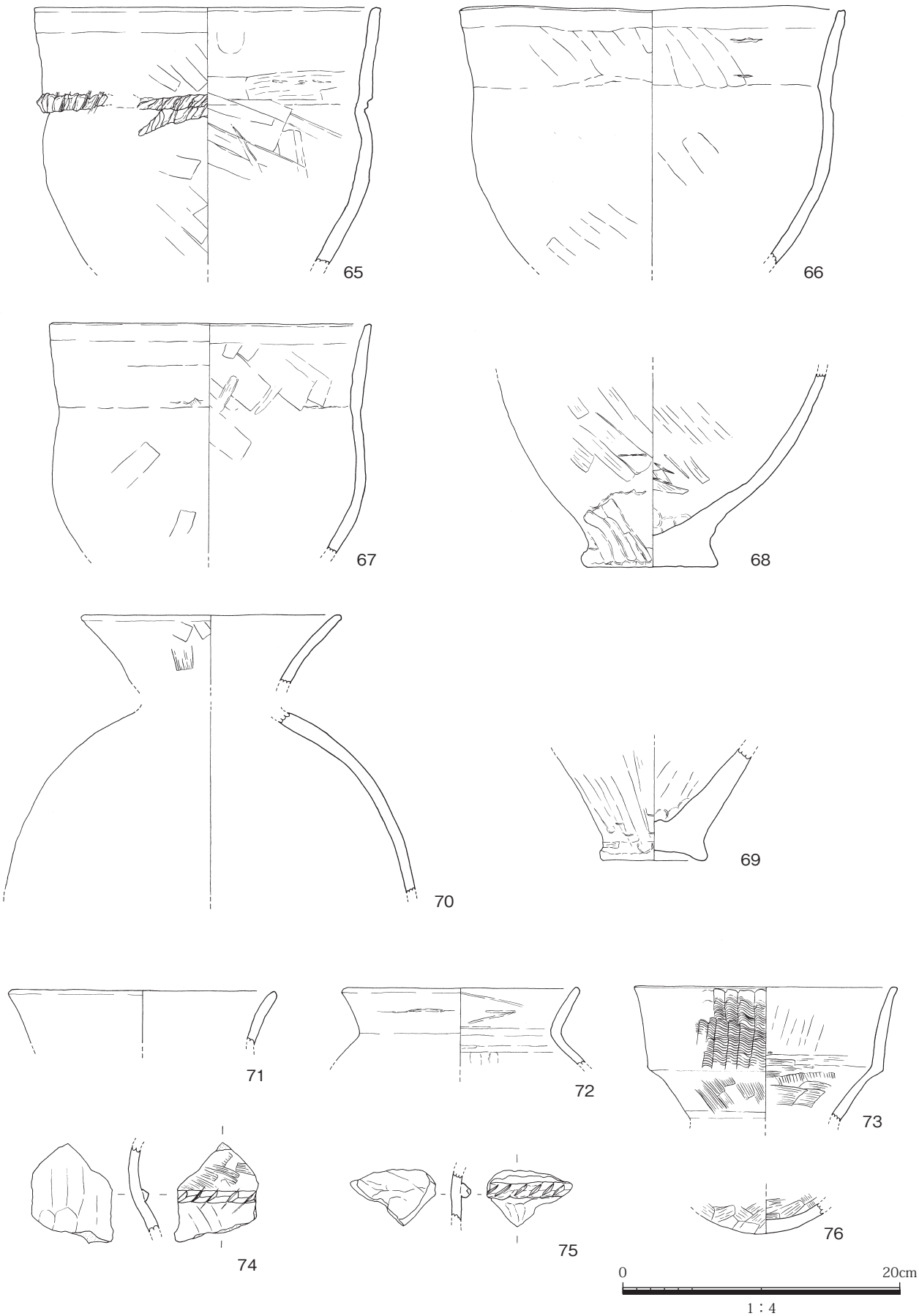
【Ｅ】多量の白色透明鉱物、少量の黒色鉱物と赤色岩片を含み、橙色を呈する。

【Ｆ】雲母を含み、褐色を呈する。

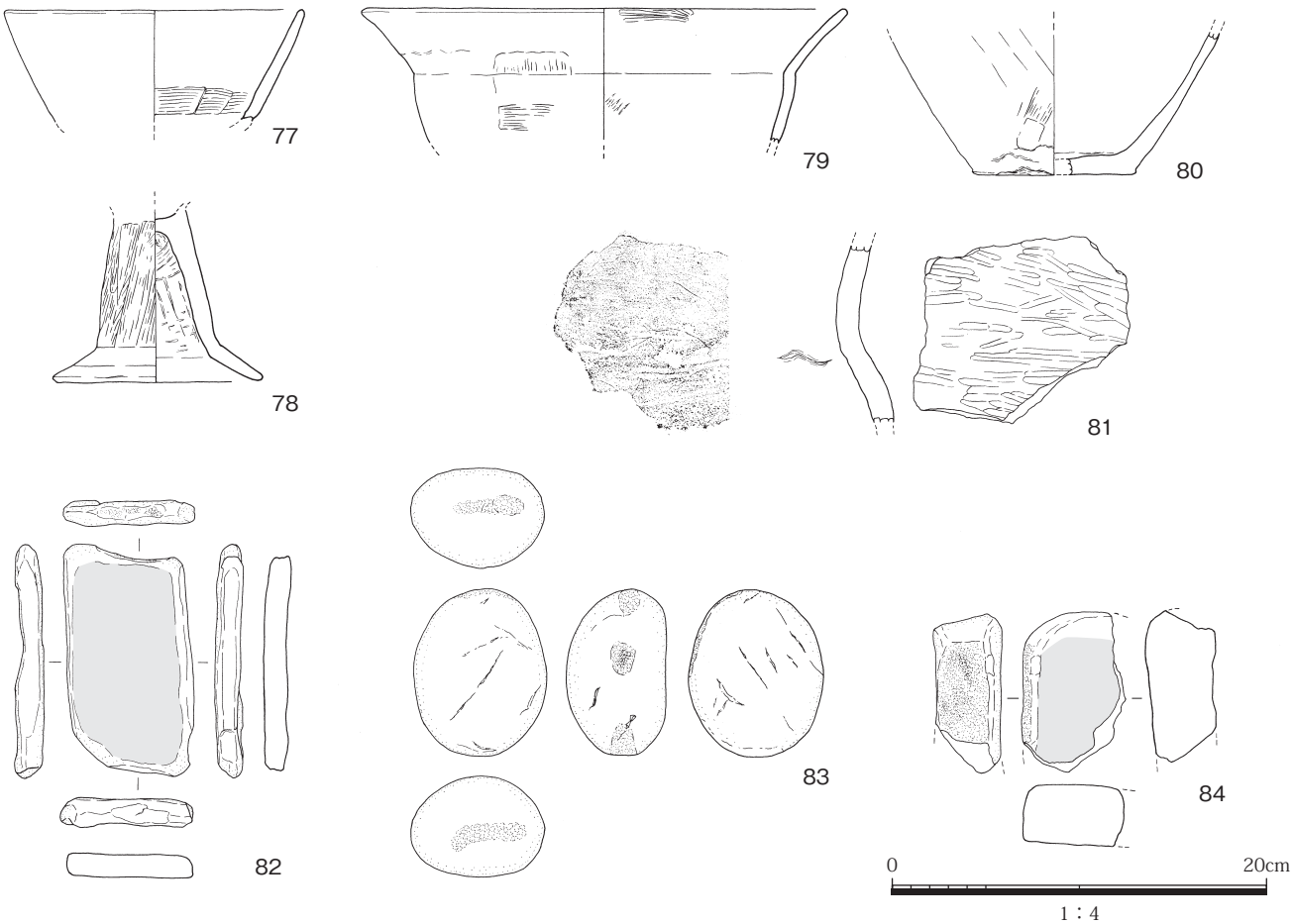
【Ｇ】【Ｅ】と同様の褐色を呈し、雲母を含まないもの。

１号竪穴建物出土土師器は、Ａグループ（３、６、７、９、14、19、25、26、29、30、31、39、41、44、45、46、47、48、49、51）、Ｂグループ（20、32 ～ 38、53）、Ｃグループ（22、24、42、50、52）、Ｅグループ（11、12）、Ｆグループ（４、５、８、10、13、15 ～ 17、21、28、40、43）、Ｇグループ（18、23）、１号土器だまり遺構出土土師器は、Ａグループ（65 ～ 71、74、78）、Ｆグループ（72、73、76）、Ｃグループ（75、77）、Ｄグループ（79、80）にそれぞれ分類される。

各種混入物は、白色透明鉱物は石英もしくは長石もしくは火山ガラス、黒色鉱物は輝石もしくは角閃石の可能性が高いが、明確な判別が困難であったため上のように記した。６つに分けられた土器群の色調はおおむね、Ａ～Ｄグループは黄色系、Ｅ～Ｇグループは橙色系と表現できる。前者は軽量、後者は胎土の密度が高く、重量感のあるものがめだつ点が特筆される。



第13図　１号土器だまり出土遺物実測図１（S＝１／４）



第14図　１号土器だまり出土遺物実測図２（S＝１／４）

第２節　遺構に伴わない遺物

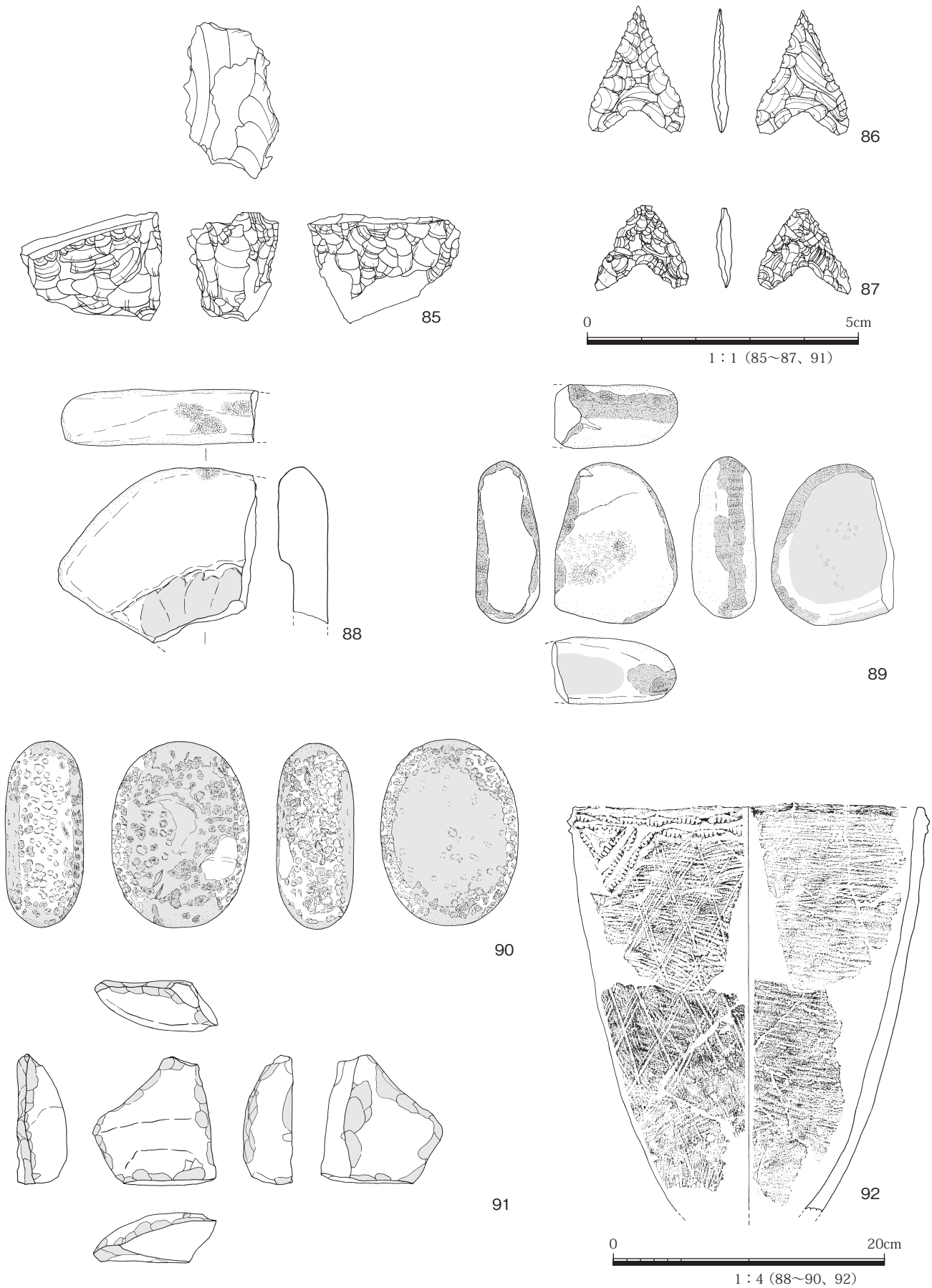
ここでは、包含層出土遺物や、表面採集資料について報告する。

石器

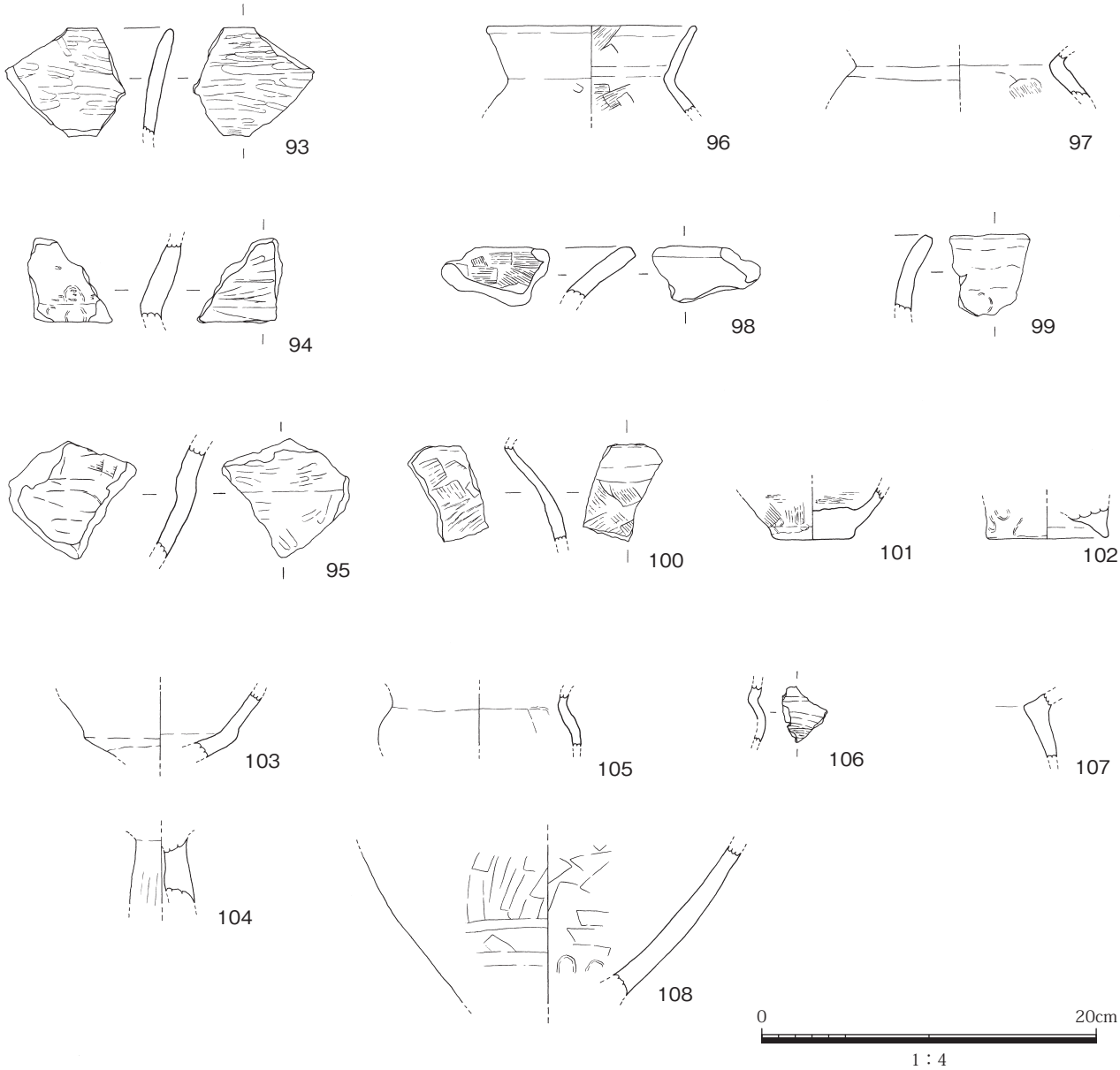
85 は黒曜石製の細石刃核である。86 は砂岩製、87 は黒曜石製の打製石鏃である。平面形は 86 が二等辺三角形、87 が正三角形を呈す。いずれも基部は凹基式である。88 は砂岩製の石皿で、繰り返し使用されたことにより顕著な擦痕が残る。89 は正面に敲打痕、背面に敲打痕と擦痕、外周部分を敲き切るようにして使用。90 は外周部分ほぼ全域に敲打痕が認められ、正面及び背面には擦痕と敲打痕が混在し、両者の先後関係は判然としない。91 は黒色の節理がはしるチャート製の火打石である。使用に伴うつぶれ方が顕著で、使用箇所には鉄分が付着する。本遺跡周辺を含めて串間市域は頁岩と溶結凝灰岩から構成されているため、外部からもたらされたものとみられる。表採資料のため、時期は特定できない。なお火打石の出土は市域では初である。

土器

92 は西之薗式土器で、口縁部に刻目隆帯文を施す条痕文土器である。口縁部に貝殻腹縁文を施す隆帯文が２条巡り、部分的に下向きの三角形状文様を施す。外面胴部には斜格子状の条線を貝殻で施文し、



第15図　包含層出土遺物実測図１（S＝１／４）



第16図　包含層出土遺物実測図２（S＝１／４）

底部は縦方向のケズリ調整を行う。検出時は破片の状態であったが、土器破損後の何らかの要因によるものか、破片単位で内外面ともに色調が明らかに異なる。出土例が少なく、周辺では鹿児島県川辺町南田代遺跡、宮崎県清武町滑川第２遺跡で類例がみられる。縄文時代前期前半に位置づけられる。93～95は内外面にミガキを施す。すべて胎土に白色透明鉱物、黒色鉱物を含む。断面を観察すると、93、95が外面側に褐色部分を残すのに対し、94は焼成が甘く脆弱な印象を与える。いずれも縄文時代後期後葉に位置づけられる。96は口縁端部をまるくおさめる。99は断面に黒色の部分を顕著に残す。100に見られる内面のハケメは、22や47のそれによく似た印象を与える。101は円盤状の底部に胴部を接合するが、内面はあまり念入りなナデつけを行わない。102は上げ底状の底部をもつ。103の高坏は本遺跡の他の高坏に比べ、法量に対する器壁の厚さが非常に厚い。104はしぼり痕跡をもつ高坏脚部片である。108は鉢の胴部片である。101、102、108はＡグループ、107はＢグループ、98は103は96、97、104はＥグループ、103はＦグループ、98は胎土含有物はＡグループと同じだが、焼成

が著しく甘い。105、106 は黒色鉱物を含まない点を除いてはＡグループと同様である。

その他

（図版４－７）は表土中から出土したものや表採によって得られた遺物である。113、114 は青磁、115 は青花、116 は薩摩焼の擂鉢である。113、114 は表土、他はⅡ層出土である。

第Ⅳ章　総括

今回の調査は、一般国道 448 号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴い実施したものである。調査では、次のような成果が得られた。

旧石器時代

出土した細石刃核は、Ⅱ層より出土したものであるが、市域では数少ない旧石器時代終末期段階を示すものである。

縄文時代早期以前

アカホヤ火山灰層以下では、遺構は土坑 1 基（4 号土坑）のみであった。出土遺物は報告した石器などに限定されるが、石皿などの存在から食に関する道具を使用する環境があったことがうかがえる。早期段階の調査事例がわずかな本地域において、貴重な事例となった。

縄文時代前期以降

Ⅳ―①層上面では、縄文時代前期以降に位置づけられる土坑を 4 基検出した（1 ～ 3 、 5 号土坑）。このうち 1 基は早期段階の 4 号土坑に上方から破壊する形で掘り込まれていた（3 号土坑）。2 号土坑は土器を伴っていた。遺跡の位置する台地上で堆積が安定しないⅢ層、及びⅣ層上面では、前期前半に位置づけられる西之薗式土器が出土した。類例の限られる土器型式であり、本城でも初出の前期段階の事例となった。後期段階では、小片ながら鉢類が出土した。

古墳時代前期

Ⅳ層上面では、古墳時代前期の竪穴建物 1 軒（1 号竪穴建物）と、土器だまり 1 基（1 号土器だまり）を検出した。いずれの遺構でも、豊富な土器と石器が出土した。これら古墳時代の遺構から出土した土師器は、その胎土及び混入物、色調の点でいくつかのグループに分けることができた。この中には雲母を含む土器群が見られた。花崗岩帯に産する雲母は九州だけでも産出地が非常に限られ、坂ノ口遺跡の付近では大隅半島の肝属山地エリアに広大な分布がある。坂ノ口遺跡出土の雲母を含む土器の色調は鹿児島県域のそれに類似しており、これらの土器、および胎土がかの地に由来するものと評価できる。大隅半島を眼前に望む串間地方ならではの結果といえよう。 1 号竪穴建物から出土した炭化物の自然科学分析では、遺物および遺跡の時期を特定するにあたって、一つの目安となる成果を得た。

中世以降

市域で初の出土となった火打ち石は、時期は不明ながら城址との関連性をうかがわせ、また少ないながらも出土した陶磁器類は本城の港における交易を想起させるものである。

調査実面積 400㎡という狭い範囲ではあったが、本格的な発掘調査事例が少なく歴史をひもとく考古学的資料が限られる当地域にとって、意義ある成果を得たといえる。

【引用・参考文献】

今塩屋毅之・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器　－宮崎平野部を中心にして－」『古墳時代中・後期の土師器』第５回九州前方後円墳研究会資料
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『南田代遺跡（川辺町）』－床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（88）
清武町教育委員会 2007『滑川第２遺跡』県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書、清武町埋蔵文化財調査報告書第 22 集
串間市 1974『串間市郷土史』
串間市 1996『串間市史』
串間市教育委員会 1990『串間市遺跡詳細分布調査報告書（Ⅰ）』
串間市教育委員会 1991『串間市遺跡詳細分布調査報告書（Ⅱ）』
串間市郷土史編さん委員会 1990『串間市史年表』
桒畑光博 2008「轟式土器」『総覧　縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画、株式会社アム・プロモーション
調査課第三調査係 2005「土器胎土の鉱物を求めて　－土器製作地推定のための基礎的研究－」『縄文の森から』第３号、鹿児島県埋蔵文化財センター研究紀要・年報
調査第二課第二調査係 2006「土器胎土の鉱物を求めて　－土器製作地推定のための基礎的研究（２）－」『縄文の森から』第４号、鹿児島県埋蔵文化財センター研究紀要・年報
中村直子 2002「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器』第５回九州前方後円墳研究会資料
平部嶠南著 1976『日向地誌（復刻版）』青潮社
平凡社地方資料センター編 1997『宮崎県の地名』日本歴史地名大系 46、平凡社
北郷泰道 2010『海にひらく古代日向　玉璧・諸県君・アジアの架け橋』みやざき文庫
宮崎県教育委員会 1993『崩先地下式横穴群』広域農道沿海南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
宮崎県埋蔵文化財センター 2005『本宮遺跡　市木川総合二級河川整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 112 集
宮崎県編 1989『宮崎県史　資料編　考古１』
宮崎県編 1993『宮崎県史　資料編　考古２』
宮崎県 1988『宮崎県文化財調査報告書』31
宮崎県教育庁文化課 1998「36　串間市」『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』
宮崎県教育委員会編 2008「（12）串間市地域」『宮崎県指定古墳等再編活用事業報告書Ⅰ』
宮田浩二・東憲章 1994「宮崎県南部における中世城郭の一例　－串間市櫛間城－」『宮崎考古』第 13 号、宮崎県考古学会

遺跡名については串間市教育委員会1990、1991を引用したが、発掘調査が行われ報告書が刊行されているものについてはその報告名を踏襲した。

表３　坂ノ口遺跡出土遺物観察表　　土器

No.	出土地点/層位	種別	器種	法量（cm、部位） 器高（cm）	色　外面 内面	調整　外面 内面	胎土混入物	焼成	備考
1、2	2号土坑	縄文土器	深鉢	― 8.8/4.8	にぶい黄褐（10YR5/3）色 にぶい褐（7.5YR5/4）色	条痕 縦、横方向 横方向ケズリ	粗。白色透明鉱物、赤色岩片、雲母	不良	粘土のつぎ目あり
3	1号竪穴建物	土師器	甕	16.8（口） 23.1	にぶい黄（2.5Y6/4） にぶい黄橙（10YR7/4）	ミガキ、ケズリ→ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	不良	作りが稚拙 スス付着
4	1号竪穴建物	土師器	甕	14.9（口） 23.5	明赤褐（5YR5/4）色 にぶい黄褐（10YR5/4）色	ミガキ→ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、雲母	良好	スス付着 外面一部破損
5	1号竪穴建物	土師器	甕	17.2（口、腹） 2.8	にぶい橙（5YR6/4）色 橙（5YR6/6）色	ナデ	白色透明鉱物、雲母、赤色岩片、黒色鉱物	良好	
6	1号竪穴建物	土師器	甕	12.7（口） 20.3	にぶい橙（7.5YR7/4）色 橙（7.5YR7/6）色	タタキ→ナデ ケスリ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	不良	スス付着
7	1号竪穴建物	土師器	甕	14.6（頸、復） 4.9	にぶい橙（7.5YR6/4）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	不良	スス付着
8	1号竪穴建物	土師器	甕	21.5（口、復） 28.3	橙（5YR6/6）色	ハケメ→ナデ	黒曜石、白色透明鉱物	良好	スス付着
9	1号竪穴建物	土師器	甕	12.3（口） 7.3	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい橙（7.5YR7/4）色	ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	不良	スス付着
10	1号竪穴建物	土師器	壺	12.9（口、復） 15.0	橙（5YR6/6）色 橙（7.5YR7/6）色	ハケメ ハケメ、オサエ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	良好	スス付着
11	1号竪穴建物	土師器	壺	13.6（口、復） 8.6	橙（5YR6/6）色	ハケメ→ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物（多量）、赤色岩片、黒色鉱物	良好	粘土のつぎ目あり
12	1号竪穴建物	土師器	壺	18.7（口） 16.9	にぶい黄橙（10YR6/4）色 橙（5YR6/6）色	ハケメ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物（多量）、赤色岩片、黒色鉱物	良好	粘土のつぎ目あり
13	1号竪穴建物	土師器	二重 口縁壺	18.9（口、復） 9.7	橙（7.5YR6/6）色 にぶい褐（7.5YR5/4）色	ハケメ→ナデ ハケメ、ナデ	白色透明鉱物、雲母、黒色鉱物	良好	スス付着
14	1号竪穴建物	土師器	壺	― 7.3	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色	ナデ、オサエ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	不良	スス付着
15	1号竪穴建物	土師器	壺	13.8（口） 3.8	にぶい赤褐（5YR5/3）色 橙（2.5YR6/6）色	ナデ ナデ→ミガキ	白色透明鉱物、赤色岩片	良好	スス付着
16	1号竪穴建物	土師器	壺	12.0（口、復） 4.1	明赤褐（5YR5/6）色	ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、黒色鉱物	良好	スス付着
17	1号竪穴建物	土師器	壺	― 3.6	明赤褐（5YR5/6）色	工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、赤色岩片、雲母	良好	スス付着、粘土つぎ目
18	1号竪穴建物	土師器	高坏	14.6（口、復） 3.7	橙（5YR7/6）色	ナデ	白色透明鉱物、雲母	良好	
19	1号竪穴建物	土師器	高坏	15.2（口、復） 5.6	にぶい黄橙（10YR7/4）色	ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
20	1号竪穴建物	土師器	高坏	17.0（口、復） 6.0	にぶい橙（7.5YR7/4）色 浅黄橙（7.5YR8/4	ナデ	黒色鉱物、赤色岩片	不良	緻密な胎土
21	1号竪穴建物	土師器	高坏	18.2（口、復） 6.3	橙（5YR6/6）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、黒曜石?、赤色岩片	良好	口縁部内外面にスス付着、歪みあり
22	1号竪穴建物	土師器	高坏	15.1（口、復） 5.1	にぶい黄橙（10YR6/3）色 にぶい黄橙（10YR6/4）色	タタキ?→ミガキ ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、長石	良好	タタキ痕残す
23	1号竪穴建物	土師器	高坏	16.8（口、復） 5.05	にぶい橙（5YR6/4）色	ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	
24	1号竪穴建物	土師器	高坏	― 4.25	にぶい黄橙（10YR7/4）色	ナデ	黒色鉱物、雲母、赤色岩片	良好	刻み目あり
25	1号竪穴建物	土師器	高坏	9.2（屈曲部、復） 2.8	明黄褐（10YR7/4）色 淡黄（2.5Y8/4）色	工具ナデ、ナデ ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	わずかにススの痕跡
26	1号竪穴建物	土師器	高坏	8.8（屈曲部、復） 3.9	浅黄橙（10YR8/4）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	内外面にスス付着、被熱前に破損?
27	1号竪穴建物	土師器	高坏	― 5.7	にぶい橙（7.5YR74）色	ミガキ ハケメ	白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	緻密な胎土
28	1号竪穴建物	土師器	高坏	12.7（裾、復） 6.6	にぶい褐（7.5YR5/4）色 にぶい黄褐（10YR5/4）色	ミガキ ハケメ、工具ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	裾部内外面にスス
29	1号竪穴建物	土師器	高坏	11.1（裾） 10.6	浅黄（2.5Y7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色	工具ナデ→ナデ ハケメ、ケズリ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	スス少量付着、坏部接合の刻み目あり
30	1号竪穴建物	土師器	高坏	19.9（口） 17.1	橙（7.5YR7/6）色	ハケメ、ミガキ、ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	坏部・脚部間のつなぎあり
31	1号竪穴建物	土師器	高坏	3.1（脚基、復） 5.4	橙（7.5YR7/6）色 灰白（10YR8/2）色	ミガキ ユビオサエ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	中実の脚部
32	1号竪穴建物	土師器	高坏	3.3（脚基） 7.9	浅黄橙（10YR8/4）色 浅黄橙（7.5YR8/6）色	ミガキ 工具ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	緻密な胎土
33	1号竪穴建物	土師器	高坏	2.7（脚基） 9.3	黄橙（0YR8/6）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色	ケズリ→ナデ ケズリ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	緻密な胎土
34	1号竪穴建物	土師器	高坏	3.4（脚基） 8.5	明黄褐（10YR7/6）色 橙（7.5YR7/6）色	ミガキ→ナデ ケズリ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	緻密な胎土
35	1号竪穴建物	土師器	高坏	10.8（裾） 12.3	にぶい橙（7.5YR74）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色	ミガキ ハケメ→ナデ、ケズリ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	ススの顕著な付着、坏底部にヒビ割れあり
36	1号竪穴建物	土師器	高坏	11.5（裾） 10.5	橙（7.5YR7/6）色 橙（5YR7/6）色	ミガキ→ナデ ケズリ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	内外面ともに顕著な摩滅、脚内部の刻み
37	1号竪穴建物	土師器	高坏	12.4（裾） 12.2	橙（7.5YR7/6）色	ミガキ ケズリ、ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	脚内部に刻みあり
38	1号竪穴建物	土師器	高坏	12.3（口） 12.3	浅黄橙（10YR8/4）色 橙（7.5YR7/6）色	ミガキ→ナデ ミガキ・ケズリ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	緻密な胎土、口縁部内外にスス付着
39	1号竪穴建物	土師器	小　型 丸底壺	10.1（口） 8.4	橙（7.5YR7/6）色	ケズリ→ミガキ、ナデ 工具ナデ、ハケメ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	いびつな仕上がり
40	1号竪穴建物	土師器	小　型 丸底壺	10.9（胴、復） 6.5	にぶい赤褐（5YR5/4）色 にぶい黄橙（10YR6/3）色	ナデ 工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	外面にスス付着
41	1号竪穴建物	土師器	壺	4.4（底） 6.8	明黄褐（10YR7/6）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色	工具ナデ→ナデ 工具ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	内外面にスス付着
42	1号竪穴建物	土師器	壺	13.1（口、復） 7.5	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	にぶい光沢を帯びる
43	1号竪穴建物	土師器	小　型 丸底壺	12.1（口、復） 9.8	にぶい橙（7.5YR6/4）色 橙（7.5YR7/6）色	ハケメ→ナデ ナデ、ミガキ?	白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	わずかにススの痕跡
44	1号竪穴建物	土師器	壺	16.0（胴、復） 5.5	橙（7.5YR7/6）色 黄橙（7.5YR7/8）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	外面にスス付着
45	1号竪穴建物	土師器	器台	12.5（裾） 5.9	浅黄橙（10YR8/4）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	スス付着
46	1号竪穴建物	土師器	器台	14.1（裾、復） 5.1	にぶい黄橙（10YR7/4）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	わずかにススの痕跡
47	1号竪穴建物	土師器	器台	18.0（裾、復） 8.1	にぶい黄橙（10YR7/4）色 橙（7.5YR7/6）色	ハケメ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	わずかにススの痕跡
48	1号竪穴建物	土師器	有　孔 土製品	5.4（残） 0.9（厚さ）	浅黄（2.5Y7/4）色	手捏ね成形	白色透明鉱物、炭?	不良	焼成が非常に甘く、崩れやすい
49	1号竪穴建物	土師器	ミニチュア土器	4.4（復） 3.9	浅黄（2.5Y7/4）色 にぶい黄（2.5Y6/4）色	手捏ね成形	白色透明鉱物、黒色鉱物、軽石	不良	焼成が非常に甘く、崩れやすい
50	1号竪穴建物	土師器	甕or壺	7.9（底、復） 3.3	にぶい黄橙（10YR6/4）色 橙（7.5YR7/6）色	工具ナデ→ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	底部外面にスス付着
51	1号竪穴建物	土師器	甕or壺	― 3.4	にぶい橙（7.5YR7/4）色 浅黄橙（7.5YR8/4）色	ナデ	白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	磨滅が著しく、大きさに反し重量がある

No.	出土地点/層位	種別	器種	法量（cm、部位） 器高（cm）	色	外面 内面	調整	外面 内面	胎土混入物	焼成	備考
52	1号竪穴建物	土師器	甕or壺	― 8.2	黒褐色（2.5Y3/1）色 にぶい黄（2.5Y6/4）色		ナデ タタキ		白色透明鉱物	不良	外面は焼成時に黒変
53	1号竪穴建物	土師器	甕or壺	― 5.7	にぶい橙（7.5YR74）色		ミガキ ハケメ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	緻密な胎土
54	1号竪穴建物	縄文	深鉢	― 4.1	橙（7.5YR6/6）色 明褐（7.5YR5/6）色		ミガキ ミガキ→ナデ		白色透明鉱物	良好	内外面にスス付着
55	1号竪穴建物	縄文	深鉢	― 10.4	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色		条痕→ナデ 条痕		白色透明鉱物、黒色鉱物	不良	粘土のつぎ目あり
65	1号土器だまり	土師器	甕	25.0（口） 18.5	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色		工具ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	貼付突帯あり
66	1号土器だまり	土師器	甕	28.0（口） 18.7	にぶい黄橙（10YR7/4）色		工具ナデ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
67	1号土器だまり	土師器	甕	23.3（口） 16.8	にぶい橙（7.5YR7/4）色		工具ナデ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	口縁部～肩部にかけ顕著なスス付着
68	1号土器だまり	土師器	甕	9.2（底、復） 13.9	にぶい橙（7.5YR7/4）色		工具ナデ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	底部外面に顕著なナデ痕
69	1号土器だまり	土師器	甕	7.4（底） 7.5	浅黄橙（7.5YR8/6）色 褐灰（10YR6/1）色		工具ナデ ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	わずかな上げ底
70	1号土器だまり	土師器	壺	18.8（口） 18.0	浅黄橙（7.5YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色		ナデ、ハケメ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
71	1号土器だまり	土師器	甕	19.4（口、復） 4.0	橙（7.5YR7/6）色 橙（7.5YR7/6）色		ナデ ハケメ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
72	1号土器だまり	土師器	甕	17.3（口、復） 5.4	にぶい橙（7.5YR7/4）色 にぶい橙（2.5YR6/4）色		ナデ ナデ、ミガキ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	にぶい光沢を発する
73	1号土器だまり	土師器	二重 口縁壺	18.9（口、復） 9.7	橙（7.5YR6/6）色 にぶい褐（7.5YR5/4）色		ナデ		白色透明鉱物、雲母、赤色岩片	良好	外面にスス付着
74	1号土器だまり	土師器	壺？	― 3.4	橙（7.5YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR7/3）色		ハケメ、ナデ ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	整った貼付突帯
75	1号土器だまり	土師器	甕or壺	― 4.1	にぶい黄橙（10YR7/4）色 灰（7.5Y4/1）色		ナデ		白色透明鉱物	不良	整った貼付突帯、外面黒変
76	1号土器だまり	土師器	壺	― 2.2	にぶい橙（7.5YR7/4）色 黄灰（2.5Y4/1）色		ナデ ハケメ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	外面にスス付着
77	1号土器だまり	土師器	高坏	16.0（口、復） 3.6	橙（7.5YR6/6）色		ナデ ハケメ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	脚部との継ぎ目で剝離
78	1号土器だまり	土師器	高坏	11.2（裾） 9.3	にぶい橙（7.5YR7/4）色		ハケメ、ナデ ケズリ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	良好	内外面にわずかにスス付着
79	1号土器だまり	土師器	鉢	26.0（口、復） 7.2	浅黄橙（10YR8/4）色 淡黄（2.5Y8/4）色		ハケメ→ナデ		黒色鉱物	不良	胎土に砂粒をほとんど含まない
80	1号土器だまり	土師器	鉢	8.7（底、復） 7.6	淡黄（2.5Y8/4）色 灰（7.5Y4/1）色		ハケメ→ナデ		黒色鉱物	不良	胎土に砂粒をほとんど含まない
81	1号土器だまり	縄文	深鉢	― 9.5	にぶい黄橙（10YR6/4」色 にぶい黄（2.5Y6/3）色		ミガキ 条痕		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	内面に粘土のつぎ目あり
92	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	26（口、復） 13.5	にぶい橙（7.5YR6/4）色 にぶい褐（7.5YR5/4）色		条痕 条痕		白色透明鉱物、黒色鉱物、黒曜石	不良	西之薗式
93	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	― 6.4	にぶい褐（7.5YR5/3）色 灰黄褐（10YR5/2）色		ミガキ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	なめらかな器面調整
94	表土	縄文土器	深鉢	― 4.8	にぶい黄橙（10YR7/4）色 にぶい黄橙（10YR6/3）色		ミガキ ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	不良	
95	Ⅱ層	縄文土器	浅鉢	― 6.8	橙（5YR6/6）色 にぶい黄褐（10YR5/4）色		ミガキ ハケメ→ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、雲母	良好	
96	Ⅱ層	土師器	甕	12.5（口、復） 4.8	にぶい黄橙（10YR6/4）色 明黄褐（10YR 7/6）色		ナデ ハケメ→ナデ		白色透明鉱物	良好	丁寧な作りの口縁端部
97	Ⅱ層	土師器	甕	12.4（頸、復） 2.7	にぶい赤褐（5YR5/4）色		ナデ ハケメ→ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	
98	Ⅱ層	土師器	甕	― 3.1	浅黄（2.5Y7/4）色 黄橙（10YR8/6）色		ナデ ハケメ		白色透明鉱物、黒色鉱物	不良	
99	Ⅱ層	土師器	甕	― 4.6	橙（7.5YR6/6）色 にぶい黄橙（10YR6/4）色		ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	
100	Ⅱ層	土師器	甕	― 5.8	明黄褐（10YR/6）色		ハケメ→ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	外面にスス付着
101	Ⅱ層	土師器	壺or甕	4.3（底） 2.6	明黄褐（10YR7/6）色 橙（5YR7/6）色		ハケメ、ナデ ナデ、指オサエ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	底部に対し薄い体部器壁
102	Ⅱ層	土師器	壺or甕	7.3（底） 1.9	橙（7.5YR7/6）色		ナデ、指オサエ ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
103	Ⅱ層	土師器	高坏	9.0（屈曲部） 3.6	にぶい褐（7.5YR5/3）色 にぶい褐（7.5YR5/4）色		ナデ		白色透明鉱物	良好	外面にわずかにスス付着
104	Ⅱ層	土師器	高坏	脚基部3.0（脚基） 4	にぶい黄橙（7.5YR6/4）色		ミガキ、ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物	良好	胎土が非常に緻密で重量がある
105	Ⅱ層	土師器	小型 丸 底壺	12.1（胴） 3.2	橙（7.5YR7/6）色		ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
106	Ⅱ層	土師器	小型 丸 底壺	― 3.4	にぶい橙（7.5YR6/4）色 橙（7.5YR6/6）色		ハケメ→ナデ ナデ		白色透明鉱物	不良	
107	Ⅱ層	土師器	器台	― 3.8	浅黄橙（10YR8/4）色 にぶい黄橙（10YR7/4）色		ナデ		白色透明鉱物、黒色鉱物、赤色岩片	不良	
108	Ⅱ層	土師器	鉢	― 9.4	浅黄（2.5Y7/4）色 灰黄（2.5Y6/2）色		工具ナデ、ナデ 工具ナデ、指オサエ		白色透明鉱物、黒色鉱物	不良	内面のみ焼成やや良好

石器

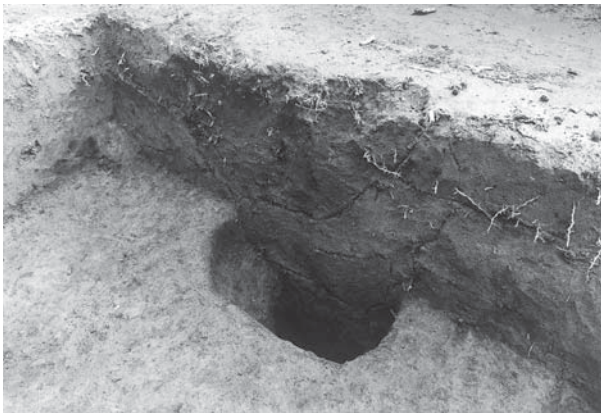
掲載№	出土地点 / 層位	種別	器種	石材	長さ（cm）/ 幅（cm）	厚さ（cm）/ 重量（kg）	備考
56	1 号竪穴建物	石器	敲・磨石	砂岩	12.0/8.7	5.3/0.8	正面の敲打痕は磨痕の後のもの。
57	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	6.3/5.8	3.0/0.13	外周部分に顕著な使用痕あり。
58	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	11.4/9.7	4.7/0.74	外周部分に敲き磨った痕跡。
59	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	7.6/6.2	2.5/0.19	
60	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	10.0/5.6	3.1/0.24	
61	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	10.2/5.9	2.5/0.22	
62	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	9.8/5.2	3.0/0.35	
63	1 号竪穴建物	石器	敲石	砂岩	4.8/4.0	3.8/0.06	
82	1 号土器だまり	石器	石皿 / 磨石	砂岩	12.5/7.0	1.5/0.2	
83	1 号土器だまり	石器	磨石	砂岩	8.8/7.1	5.3/0.49	
84	1 号土器だまり	石器	磨石	砂岩	8.4/3.6	3.3/0.25	
85	Ⅱ層	石器	細石刃核	黒曜石	2.8/1.7	1.9/0.009	
86	Ⅱ層	石器	石鏃	砂岩	2.3/1.8	0.2/0.007	
87	Ⅱ層	石器	石鏃	黒曜石	1.5/1.3	0.2/0.006	
88	Ⅴ層	石器	磨石	砂岩	13.2/14.5	4.1/0.941	上面に敲打痕あり
89	Ⅱ層	石器	敲・磨石	砂岩	11.9/8.8	5.2/0.79	敲打面と磨面を使い分けている
90	Ⅱ層	石器	敲・磨石	砂岩	13.8/10.1	5.7/1.16	敲打痕と磨痕が重なり合う
91	表土	石器	火打石	チャート	2.3/2.2	0.9/0.005	つぶれた部分に褐色のサビ付着

鉄器

掲載 No.	出土地点 / 層位	種別	型式	長さ / 幅	厚さ / 重量	備考
64	1 号竪穴建物	鉄器	柳葉型	8.8/9.5	7.75/0.95	

1　土層堆積状況１（北壁）

2　土層堆積状況２（西壁）



3　３・４号土坑調査状況（北より）

4　１号土坑調査状況（南より）

5　２号土坑調査状況（南より）

6　２号土坑遺物出土状況（南より）

【図版2】

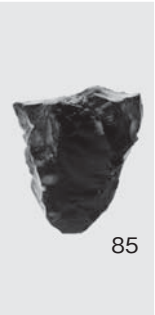
1　1号竪穴建物上面遺物出土状況（南より）

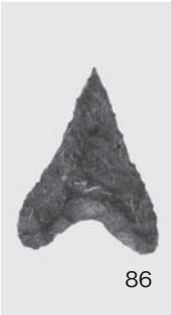
2　1号竪穴建物粘土塊調査状況（南より）

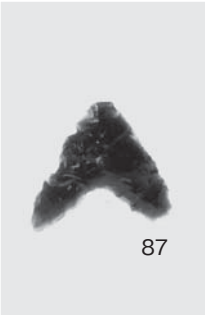
3　1号竪穴建物遺物出土状況近景（北東より）

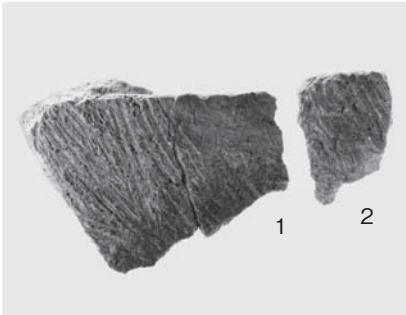
4　1号土器だまり遺物出土状況遠景（南より）

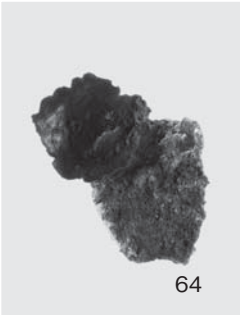
5　1号土器だまり遺物出土状況近景

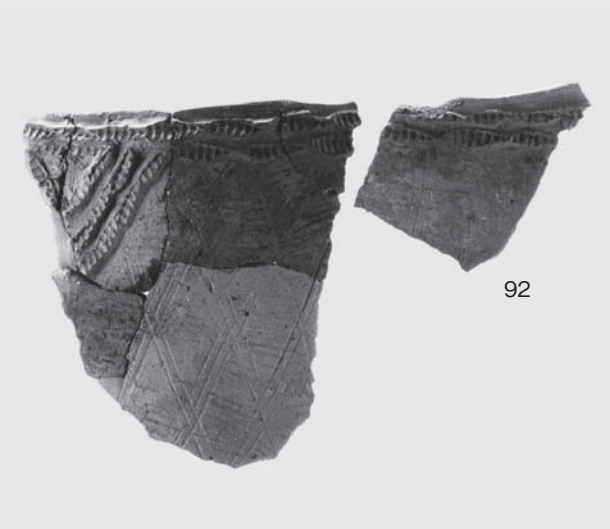

85

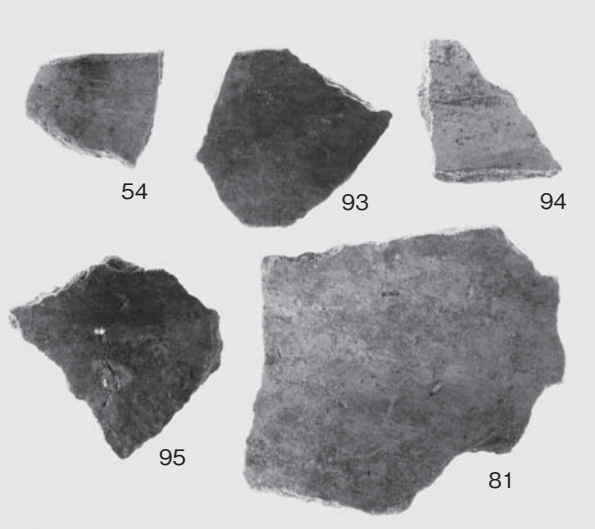

86


87


1 2


64


92

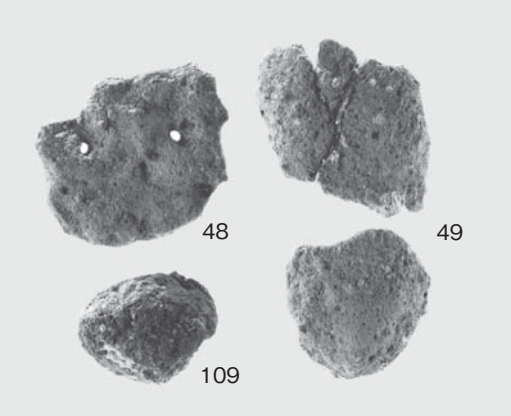

54 93 94 95 81

22 21

30 29

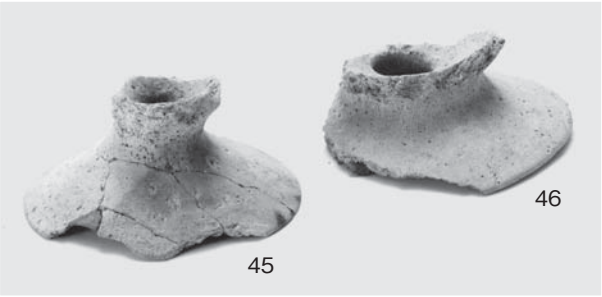
29 口縁接合部

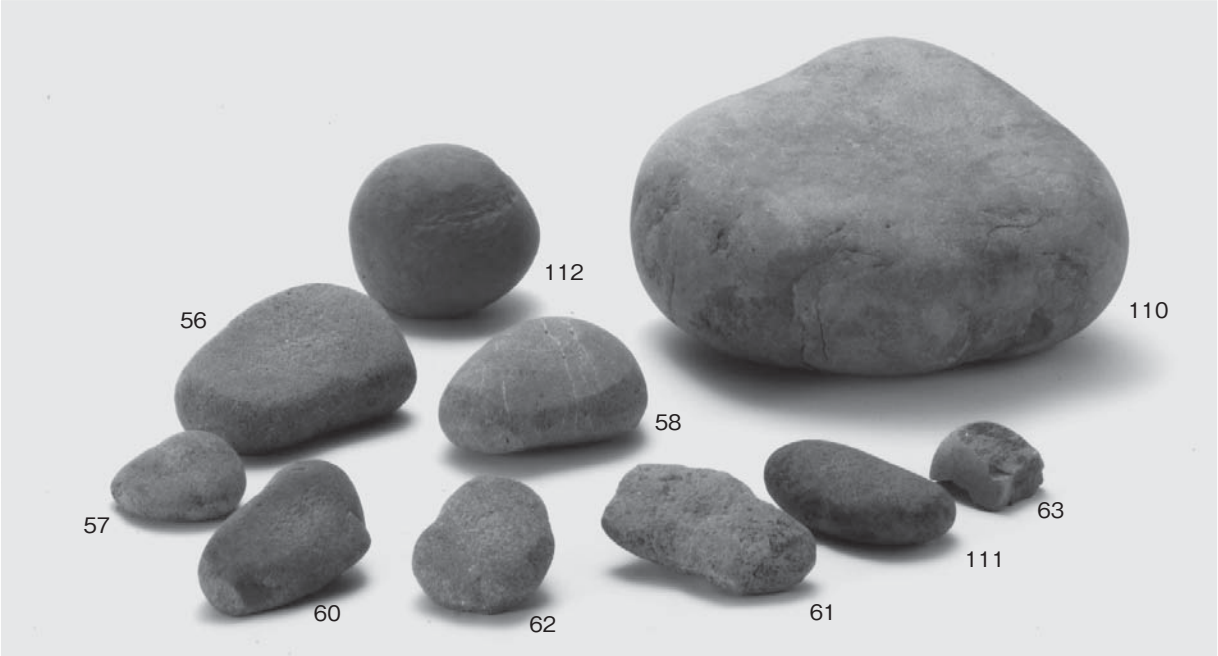
37 35 38

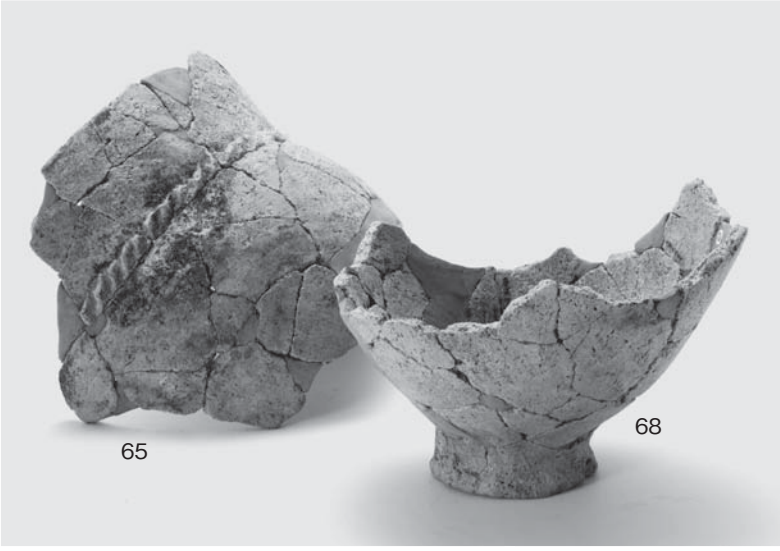

48 49 109

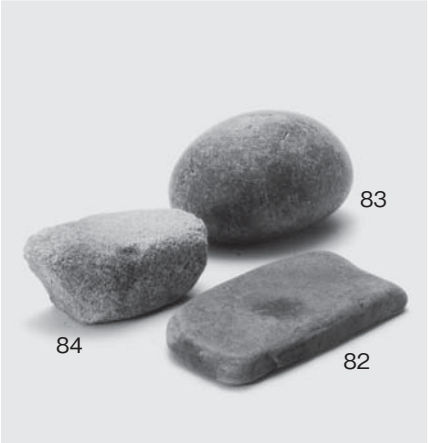
【図版4】

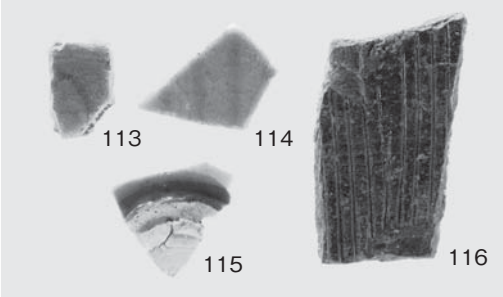
39
41


45
46


112
110
56
58
57
63
111
60
62
61


65
68


83
84
82


113
114
115
116

91

78

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さかのくちいせき
書 名	坂ノ口遺跡
副 書 名	一般国道448号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻 次	1
シ リ ー ズ 名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第221集
編 著 者 名	宗廣睦子、日高広人
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒880－0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地　TEL 0985－36－1171
発 行 年 月 日	2012年3月23日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
坂ノ口遺跡（さかのくちいせき）	宮崎県串間市（みやざきけんくしまし）大字本城（おおあざほんじょう）字坂ノ口（あざさかのくち）	45207	4028	31度26分18秒付近	131度15分13秒付近	2010.8.26～2010.10.28	約400㎡	一般国道448号（上千野～代田工区）道路改良工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂ノ口遺跡（さかのくちいせき）	集 落	縄文時代早期以前	土坑 1基	細石刃核、石皿、石鏃	
		縄文時代前期以降	土坑 4基	縄文土器	
		古墳時代前期	竪穴建物 1軒 土器だまり 1基	土師器、石器、鉄器、粘土塊	

要 約	坂ノ口遺跡は串間市本城に所在する。調査の結果、旧石器時代終末期～中世にかけての遺構・遺物を確認した。中でも、古墳時代前期に相当すると考えられる竪穴建物や土器だまりからは、大隅地方との交流を物語る土師器が出土した。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２２１集

串間市所在

坂ノ口（さかのくち）遺跡

一般国道４４８号（上千野～代田工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１２年３月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880－0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985（36）1171　FAX 0985（72）0660

印　刷　株式会社　長崎印刷
〒889－4413　宮崎県西諸県郡高原町大字後川内 18－2
TEL 0984（42）1069　FAX 0984（42）1330